

宮崎県文化財調査報告書

第 36 集

平成 5 年 3 月

宮崎県教育委員会

宮崎県文化財調査報告書

第 36 集

平成 5年3月

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会においては、文化財の保護及び文化財指定のための調査や、土木工事等の諸開発事業に伴う遺跡の緊急発掘調査を実施し、その報告書を刊行して、文化財の保護・活用に対する理解を頂いているところであります。

この度は、昭和59年度調査の高鍋町南中原遺跡、昭和62年度調査の小半田古墳、平成元年・2年度調査の船塚遺跡など計三遺跡の発掘調査について集録しております。

本書が、社会教育・学校教育の場において広く活用され、あわせて学術研究上の資料として役立つことを期待いたします。

なお、調査に際してご協力をいただいた地元の方々、及び市町村教育委員会の方々の深甚の謝意を表します。

平成5年3月

宮崎県教育委員会

教育長 高山義孝

例 言

- この報告書は、宮崎県教育委員会が主体となって実施した埋蔵文化財発掘調査の一部を集録したものである。
- 掲載している遺跡名・所在地・調査期間・執筆者は下記のとおりである。
- 本報告書の編集は、宮崎県教育庁文化課が行った。

記

遺跡名	所 在 地	調 査 期 間	調査担当	執 筆 者
南中原遺跡	児湯郡高鍋町 大字上江字南中原	昭和60年1月21日 ～2月1日	永友良典	永友良典
小半田古墳	西臼杵郡五ヶ瀬町 大字桑野字小半田	昭和62年5月22日 ～7月1日	北郷泰道	北郷泰道
船塚遺跡	宮崎市船塚 3丁目210	平成元年8月1日 ～2年3月31日 平成2年5月22日 ～7月27日	宍戸 章 岩永哲夫 菅付和樹 山田洋一郎	宍戸 章 山田洋一郎

総 目 次

1. 南中原遺跡調査報告	1
2. 船塚遺跡第Ⅱ・第Ⅲ地点調査報告	19
3. 小半田古墳調査報告	49
付1. 平成3年度埋蔵文化財発掘調査一覧	56
付2. 平成3年度宮崎県市町村教育委員会発行埋蔵文化財調査報告書一覧	66

みなみ なか ばる
南 中 原 遺 跡

例　　言

1. 本報告は羽根田地区は場整備事業に伴い県教育委員会が昭和59年度に行なった南中原遺跡の確認調査（道路部分）の報告書である。
2. 南中原遺跡の確認調査は昭和60年1月21日から2月1日にかけて行われた。調査は県教育委員会文化課主任主事永友良典（現県総合博物館埋蔵文化財センター主査）が担当した。
3. 本報告の執筆・編集は永友が行った。
4. 出土品は県総合博物館埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

I.はじめに	1
II.調査の結果	2
1. 遺構	2
(1) 土壌	2
(2) 東西道トレンチ柱穴群	4
2. 遺物	4
(1) 土壌出土の遺物	4
(2) 東西道トレンチ出土の遺物	4
III.まとめ	12

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 調査区およびトレンチ配置図	3
第3図 遺構・遺物分布図および土層断面図	3
第4図 土壌実測図	5
第5図 土壌出土遺物実測図	5
第6図 東西道トレンチ出土遺物実測図 (1)	7
第7図 東西道トレンチ出土遺物実測図 (2)	8
第8図 東西道トレンチ出土遺物実測図 (3)	9
第9図 東西道トレンチ出土遺物実測図 (4)	10
第10図 東西道トレンチ出土遺物実測図 (5)	11

図 版 目 次

図版 1 遺跡全景／東西道トレンチ（拡張トレンチ付近）	13
図版 2 土壌（遺物検出）／土壌出土遺物	14
図版 3 土師器壺を検出した柱穴および出土遺物／東西道トレンチ出土遺物（1）	15
図版 4 東西道トレンチ出土遺物（2）	16
図版 5 東西道トレンチ出土遺物（3）	17

I. はじめに

1. 位置と環境

南中原遺跡は児湯郡高鍋町大字上江字南中原に所在する。小丸川右岸には標高80m～90mの牛牧台地が広がっているがその北東端の1段下には小丸川の低地との間に細長く延びる河岸段丘が中間台地状にある。遺跡はこの河岸段丘の山裾側に位置する。遺跡周辺の標高は15m～20m、低地面からの比高差は10mほどあり水田や畠地が広がる。

遺跡周辺には北西側の青木山王地区に前方後円墳3基、円墳8基からなる山王古墳が分布するがは場整備事業などにより周辺を深く掘削されている。また、牛牧台地の北東縁辺部には前方後円墳2基、円墳18基からなる牛牧古墳、東縁辺部には円墳3基の大戸ノ口古墳が分布するのをはじめ大戸ノ口第二遺跡など繩文時代から中世の遺跡が数多く分布する。さらに、牛牧台地北側の斜面には横穴12基からなる老齋横穴も分布する。

2. 調査の経緯と経過

羽根田地区は場整備事業の区域内に古墳時代および中世の遺物散布地が所在していたことから県文化課、児湯農林振興局、一つ瀬川土地改良事務所と協議を行ったところ遺跡の大半は設計変更により保存されることになったが、遺跡の縁辺部をとおる農道部分について遺構等の有無を



第1圖 遺跡位置圖

確認してあわせて記録保存の措置をとるため昭和60年1月21日から2月1日にかけて道路部分のみを対象に確認調査が行われた。調査は県教育委員会文化課主任主事永友良典（現県総合博物館埋蔵文化財センター主査）が担当した。

調査の対象とした道路部分は東西方向に延びる5m幅の東西道とその東側に南北方向に延びる幅3mの南北道があるが南北道はすでにアカホヤ火山層まで削平されていたため、東西道のみを対象とし、道路幅の中央に幅1.5m、長さ約80mのトレンチ（東西道トレンチ）を設定した。また、設定トレンチの東端周辺の東西道トレンチ外区についてはジョレン精査による遺構の確認を行った。

II. 調査の結果

東西道トレンチは基本土層がⅠ層：表土（耕作土）、Ⅱ層：明褐色土層、Ⅲ層：黒色土層、Ⅳ層：アカホヤ火山灰層、Ⅴ層：黒色土層、Ⅵ層：灰褐色土層である。また、トレンチ東端が地表面からアカホヤ火山灰層まで20m程の深さであるのに対して中央部から西にかけは80cm～90cmと深くなり西側に傾斜する地形である。

調査ではⅢ層から縄文土器、土師器、陶磁器などの土器片や石斧、石錘、磨石などの石器類が出土している。さらにⅣ層まで精査したところアカホヤ火山灰層上面で柱穴跡が多數検出された。特に建物跡が想定されたトレンチ東側では調査区を南側に拡張して建物跡の検出に努めた。結果的には建物跡は確認できなかったが柱穴跡60余が検出された。また、柱穴からは完形の土師器の壺や土師器皿、陶磁器片などが出土している。

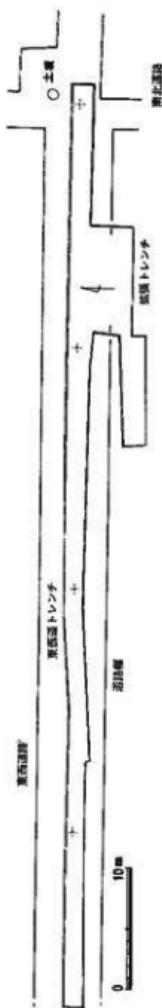
調査区東端の東西道トレンチ外区からは完形品の壺をはじめ土師器3点が出土した古墳時代の土壙1基が検出された。

1. 遺構

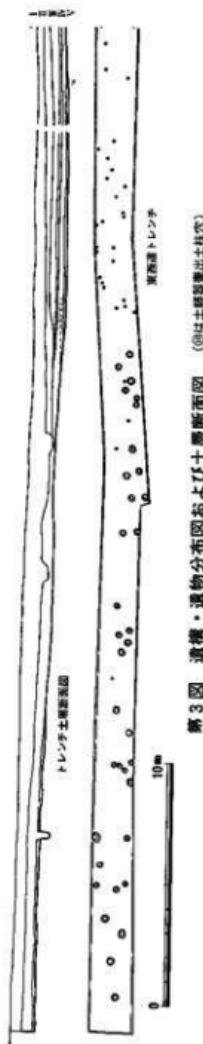
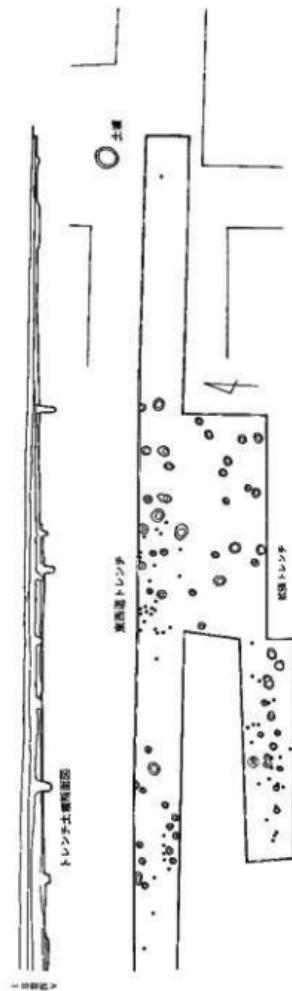
(1) 土壙（第4図）

土壙は調査区東端の東西道トレンチ北側のトレンチ外区から1基検出された。検出地点は遺跡内でも幾分微高地にあたる場所で耕作土直下から検出された。径79cm～73cm、検出手面からの深さ約16cmの円形の上壙である。床面の径が65cm～61cmと上場と床面の径がさほど変わらない方形状の断面を呈する。

土壙からは完形の壺、鉢、高壙の壺部の土師器3点が土壙の中央部付近でまとめて出土した。出土状況は、鉢が床面中央に横向きの状態で、高壙の壺が鉢の南側に上向きに、壺が鉢の上に鉢と同じ方向に横向きに見つかった。壺は横転していたため耕作で口縁部から胴部にかけて2分の1から3分の1欠損していた。土壙内の埋土の状態はレンズ状に異なった3層の埋土が確認され



第2図 調査区およびトレンチ配置図



第3図 遺構・遺物分布図および土壌断面図
(@は土器等出土柱穴)

たことから自然堆積による埋土と思われる。埋土の状態や甕・鉢の出土状況から3点の土師器は上漿中央に立てた状態でまとめて置かれていたと思われる。

(2) 東西道トレンチ柱穴群（第3図）

東西道トレンチ内で60余の柱穴跡が検出された。柱穴跡はトレンチ東端の微高地側とトレンチ内で最も深い中央部の一部で疎になるほかはトレンチ全域に見られる。道路幅のみの調査であつたため建物跡の確認はできなかった。柱穴は多くがIV層のアカホヤ火山灰層上面での検出であつたが土層断面からII層の明褐色土層からIII層の黒色土層にかけて掘り込まれている。柱穴は径30cm～50cm、確認面からの深さ40cm～70cmの柱穴が多く見られる。径が大きく深めの柱穴は東側に集中する。遺物を含む柱穴はほとんどないが完形の土師器の小型壺が柱穴内から出土している。

2. 遺 物

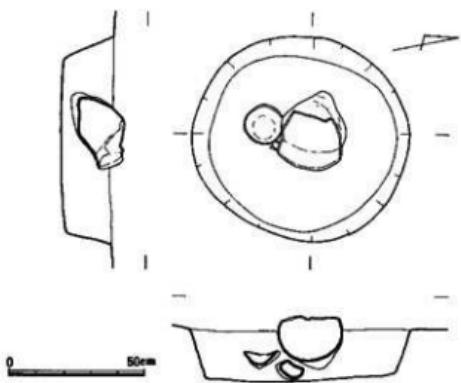
(1) 土壌出土の遺物（第5図1～3）

土壌からは完形の甕、鉢、高环の坏部の土師器3点が出土している。甕(1)は横転していたため口縁部から胴部にかけて一部を欠くがほぼ完形の状態で出土した。口径24cmと口縁部に最大径を持つ。頭部にくびれはほとんどなく口縁は直立気味に外傾する。胴部最大径は22.6cmと胴部中央よりやや上に持ち上がり気味の丸底の底部へつながる。器高は26cmを測る。調整は内面が口唇から口縁上位にかけてヨコナデ、口縁下位から胴部中位にかけて斜方向のハケメ、胴部下位をナデ、底部を指押えで調整している。外面は口縁から胴部下位にかけて平行線タタキ、底部をナデ調整が施されている。口縁下位から頸部にかけてはタタキのあとに指押えによる調整が見られる。外面全体と内面胴部下位にススが付着している。また、胴部中位から頸部にかけて粘土のつなぎ目が3～4条見られる。鉢(2)も完形の状態で出土した。平底の底部から口縁部に向って外傾しながら広がる逆台形状の鉢である。口径10.5cm、底部径5.3cm、器高8.4cm、鉢内部の深さ7.6cmを測る。外面内面ともナデ調整が施されており、粘土のつなぎ目が残る。口縁部内面と底部内面は指押えの調整が見られる。高环の坏部(3)も完形の状態で出土した。半球状の楕円形の坏である。口径11cm、环内部の深さ7.6cmを測る。外面は複雑なナデ調整が施されており粘土のつなぎ目が残る。内面は中位から口縁部にかけてハケメによる調整、下位をナデと指押えによる調整が施してある。

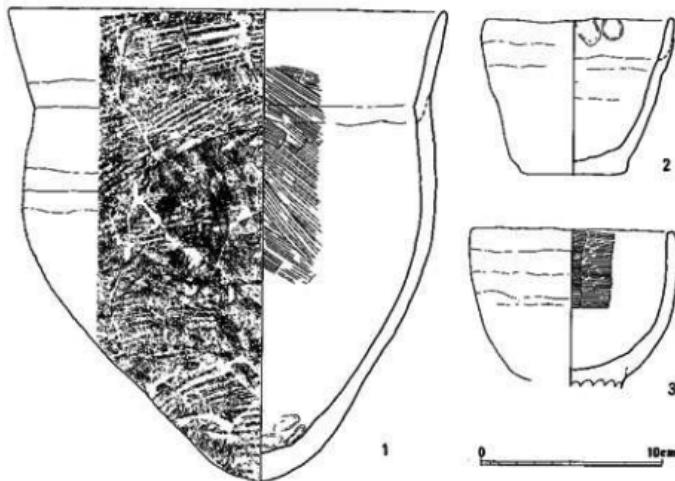
(2) 東西道トレンチ出土の遺物（第6図～第10図）

縄文土器（第6図4～9）

4～6は貝殻条痕土器の口縁部片、8は磨研土器の口縁部片、9は組織痕土器の胴部片である。4は内外面および口唇部に貝殻条痕が施されている。5・6はともに内面に貝殻条痕、外面および口唇部にナデによる調整が施されている。7は「T」字状に肥厚した口縁部に二条の沈線とその間に細い連続刺突を施文している。内外面ともナデによる調整がおこなわれている。また沈線間に縄文らしい施文が残る。8は内外面にヘラ磨きによる調整が施されている。口縁部は



第4図 土壌実測図および出土遺物実測図



第5図 東西道トレンチ出土遺物実測図 (1)

「S」字状を呈し、口唇部は丸みを持つ。9は厚手の土器で表面に組織痕と思われる細かな網目文が深く施されている。裏面はいくぶんの磨きがかかっている。

土師器（第6図10～27、第7図28～34）

10は柱穴内から出土した器高12.6cmの光形の壺である。胴部最大径が13.8cmの球形の胴部に3cm程の外反する口縁が付く。口径は8.9cm、頸部径は7.6cmを測る。底部は底部径5.6cmの平底で木の葉底となる。内外面とも板状工具を使ったと思われる比較的粗いナデ調整が施されている。また、その上から指頭によるナデが器面全体に見られる。

11～15は壺および壺の口縁部片である。11は「く」の字に外傾する壺の口縁部片で頸部の下に1.5cm程の沈線が斜めに見られる。12は「く」の字口縁、13・14は頸部のくびれが余りない壺の外反する口縁部片、15は無頸壺の口縁部片である。

16～19は壺および壺の胴部片である。16～18は粗いタタキ調整を外面に施している。内面はナデ調整となる。いずれも線刻状の鋭い平行タタキである。17にはタタキの方向とは逆方向に數本の沈線が見られる。18は底部付近の部位である。19には格子タタキがみられる。

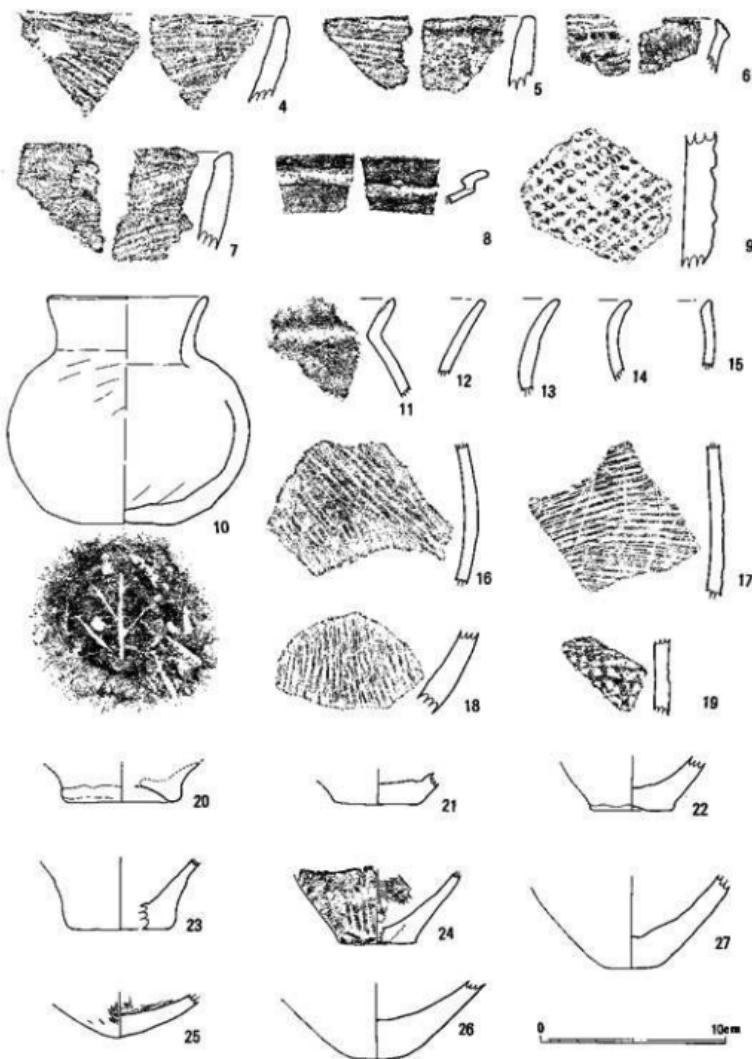
20～27は壺および壺の底部。20は上げ底気味の底部、21～24は平底、25～27は丸底気味の底部である。20～23、25・26は内外面ともナデ調整が施されている。24は内面をハケメ、外面をタタキのあとナデで調整している。27は内外面ともハケメによる調整が施してある。

28～34は高環の一部である。28は高環の環部で底部を欠く。口径23.9cm、环部内の深さ約7cmを測る。环部下位に稜を持ち大きく口縁部が外反する。内外面ともナデ調整が施されている。口縁部端部の内面にミガキ痕も認められる。29は高環の环部から脚部上位かけての部位である。环部は椀状を呈しており口縁部が若干外に広がる。口径14.6cm、环部内の深さ5.5cmを測る。环部と脚部の継ぎ目にはめ込み痕がみられる。脚部は4.3cm～3.5cmと細身である。内外面ともハケメのあとナデによる調整が見られる。くびれ部外面は指頭によるナデ調整が施されている。30・31は环部から脚部にかけてのくびれ部である。30はくびれ部径7.7cmを測る。31はくびれ部径が推定5.2cmを測り环部と脚部の継ぎ目にはめ込み痕がみられる。32は高環脚部の裾にあたる。33・34は高環脚部にあたる。两者ともくびれ部から裾部に向かって「八」の字に広がるが、34は裾端部までそのまま一気に大きく開くが、33は裾部までは緩やかに開き腰を有して裾端部に向かって大きく開く。34は二カ所に穿孔がみられる。残存状況から四方透かしと思われる。

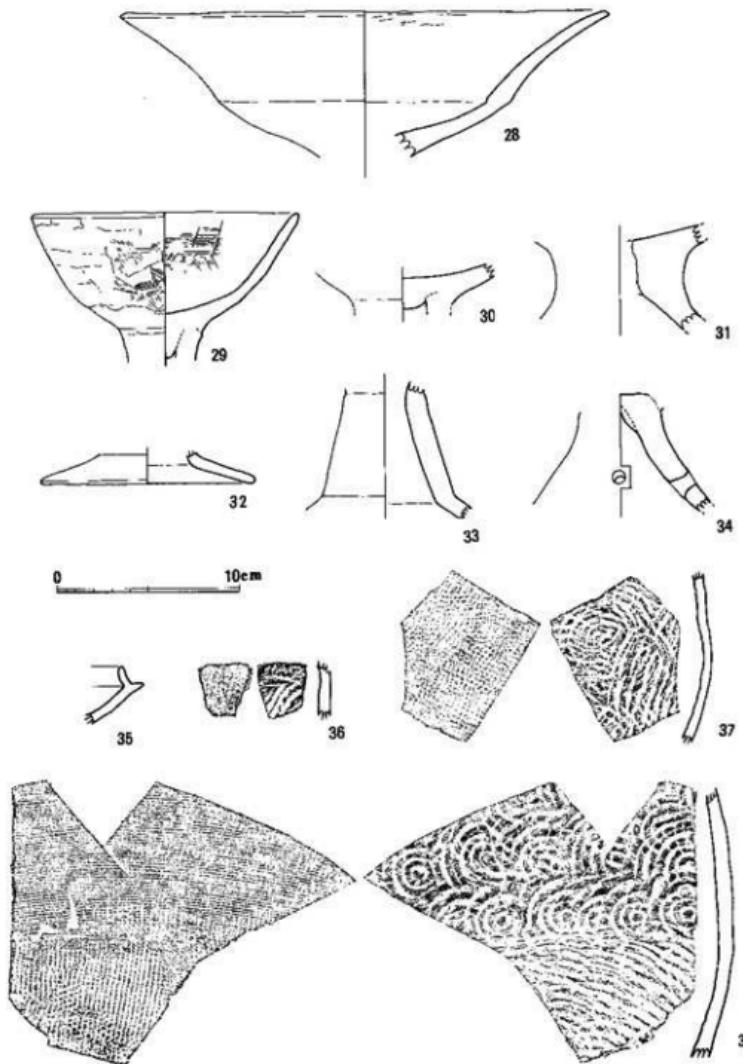
39・40はヘラ切り底の土師皿である。いずれも口縁部を欠く。39は推定底径6.4cm、40は推定底径5.2cmである。いずれも底部以外の内外面ともナデによる調整が見られる。

須恵器（第7図35～38）

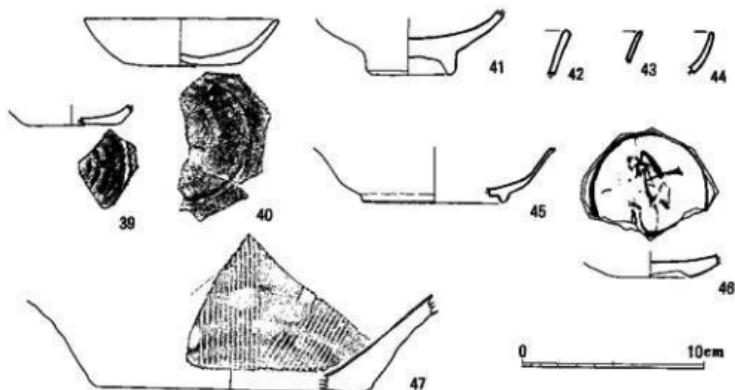
36～38は壺の胴部片である。36は外面を細かな平行および格子のタタキによる調整、内面を同心円タタキによる調整が施されている。37・38は外面を細かな格子タタキ、内面を同心円タタキによる調整が施されている。35は环身の口縁部片である。内外面とのナデ調整痕が見られる。推



第6図 東西道トレンチ出土遺物実測図 (2)



第7図 東西道トレンチ出土遺物実測図 (3)



第8図 東西道トレンチ出土遺物実測図(4)

定口径11.7cm、推定受部径14.8cm、たちあがり高0.2cmを測る。

陶磁器(第8図41~47)

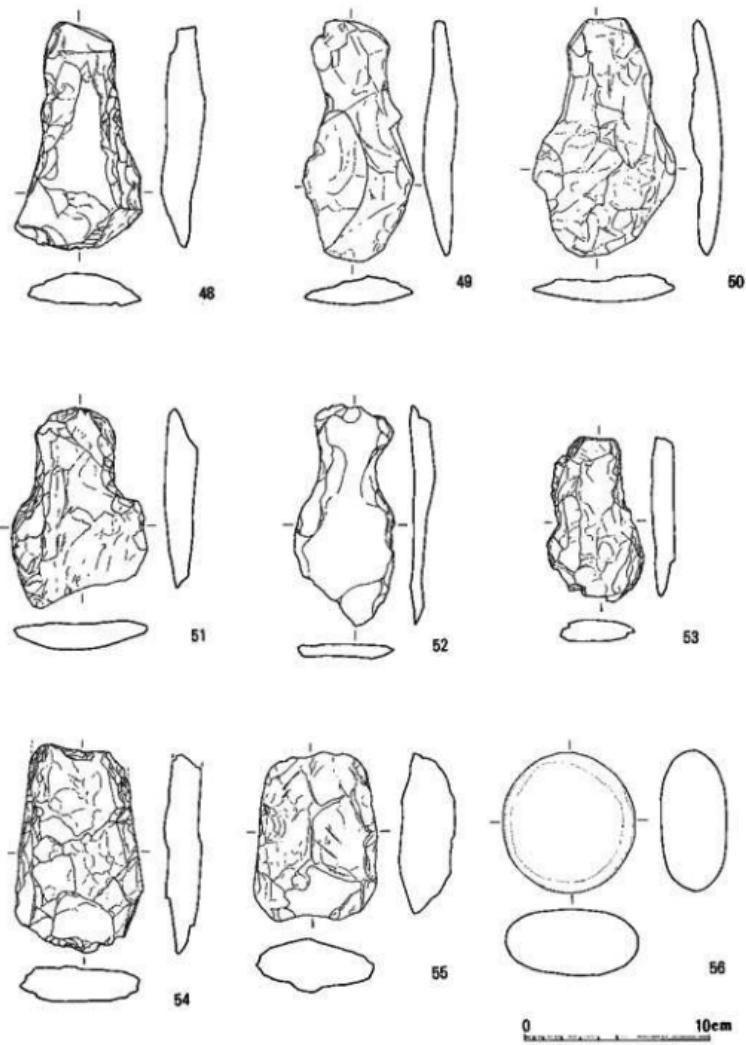
41は青磁碗の底部片。高さ1.2cm程の高台をもち、底部径5cmを測る。高台の内側は露胎となる。42は青磁碗の口縁部片。43・44は白磁碗の口縁部。45は白磁碗の底部から胴部にかけての破片で高台を有する。推定底部径は7.7cmを測る。

46は染め付け皿の底部片。

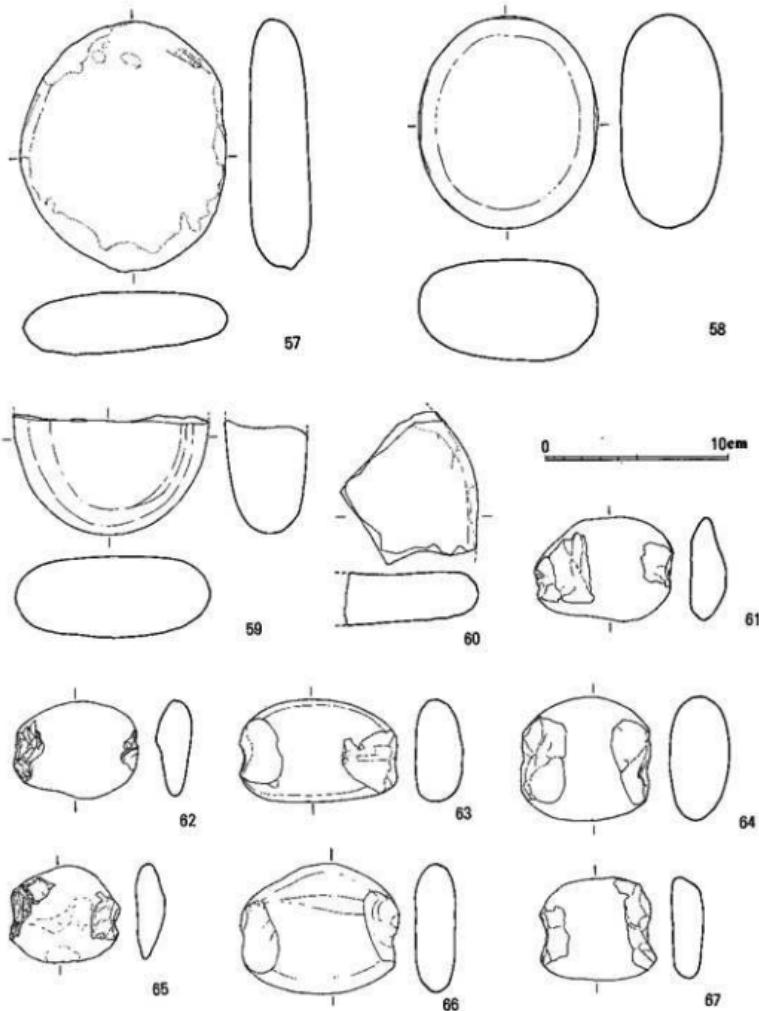
47は備前焼の擂鉢の破片。底部片で内面に12条単位のカキメが放射状に二条見られる。

石器(第9図48~56、第10図57~67)

48~53は有肩打製石斧である。48は表面(実測面)に一部自然面を残す。最大長12.5cm最小幅3.9cm最大幅6.5cm、最大厚2.2cmを測る。49は最大長13.4cm、最小幅3.4cm、最大幅6.0cm、最大厚1.6cmを測る。50は裏面は全面自然面が残る。最大長13.2cm、最小幅4.5cm、最大幅7.7cm、最大厚1.7cmを測る。51は刃部を欠損する。表面に自然面を一部残す。最小幅4.2cm、最大幅7.4cm、最大厚1.7cmを測る。現存長は10.3cmである。52は刃部を大半欠く。最大長12.3cm、最小幅3.1cm、最大幅5.4cm、最大厚1.2cmを測る。53は最大長9.0cm、最小幅3.9cm、最大5.2cm、最大厚1.1cmを測る。54・55は短冊形の打製石斧である。54は基部側を欠く。最小幅5.2cm、最大幅7.1cm、最大厚2.0cmを測る。現存長は12.0cmである。55は最大長9.3cm、最小幅5.0cm、最大幅6.7cm、最大厚2.9cmを測る。石材は48・49・51・52は砂岩、50は粘板岩、53・54・55は頁岩である。



第9図 東西道トレンチ出土遺物実測図 (5)



第10図 東西道トレンチ出土遺物実測図 (6)

56～60は磨石およびたたき石である。56は側面以外を磨る。最大長7.8cm、最大幅7.2cm、最大厚3.6cm、重量302gを測る。57は側面に敲打痕が見られる。最大長13.8cm、最大幅11.4cm、最大厚3.3cm、重量747gを測る。58は側面の一部を除いて磨る。最大長9.9cm、最大幅11.6cm、最大厚5.6cm、重量900gを測る。59は半分を欠く。側面の一部を除いて磨る。60は5分の4ほどを欠く。上面を磨っており側面には敲打痕が見られる。石材は56・58・59が溶結凝灰岩、57・60は砂岩である。

61～67はいずれも両端部を打ち欠いた石錘である。61は最大長7.5cm、最大幅5.8cm、最大厚2.5cm、重量122gを測る。62は最大長6.8cm、最大幅5.3cm、最大厚1.9cm、重量84.5gを測る。63は最大長8.6cm、最大幅5.7cm、最大厚2.7cm、重量197gを測る。64は最大長7.1cm、最大幅6.8cm、最大厚3.3cm、重量238gを測る。65は最大長5.1cm、最大幅5.9cm、最大厚1.6cm、重量72gを測る。66は最大長8.6cm、最大幅7.2cm、最大厚2.2cm、重量211gを測る。67は最大長6.3cm、最大幅5.7cm、最大厚1.8cm、重量102gを測る。61・63の石材は溶結凝灰岩である。

III.まとめ

検出された土壙は、土師器の出土状況や土壙の埋上の状況などから壺・环・高坏を土壙中央に立てて置いたもので貯藏穴的性格を持つ土壙と思われる。出土土器のうち粗い太めのタキを施した壺は川南町から高鍋町、新富町を経て佐土原町に至る児湯郡を中心とする県中央部に出土する土器で4世紀後半から5世紀前半と思われる。

東西道トレンチの出土品では、繩文土器が貝殻条痕文土器など後期のものと、磨研土器などの晩期のものが数点見られる。あわせて出土した石器類も後期から晩期の時期のものと思われる。

また、壺や環、高坏などの土師器類は土壙出土の土器群とほぼ同時期と思われる。さらに、陶磁器類は時期を判別できる資料がないのが中世の時期のものと思われる。トレンチ内で検出された柱穴群は4世紀後半から5世紀前半と想われる木の葉底を持つ壺を出土した柱穴も見られるが全体像は明確ではない。とりあえず古墳時代および中世の柱穴群としておきたい。

今回は道路部分の確認調査として幅1.5mほどのトレンチ調査であったため遺跡の性格は把握できなかったがトレンチ東側の土壙付近の微高地周辺に古墳時代前期から中期にかけての遺構群が広がるほか、遺跡全域に古墳時代および中世の柱穴群などが広く分布する可能性がある。今回のは場整備において道路部分以外は大半が包含層を残しており今後注視したい。



遺跡全景



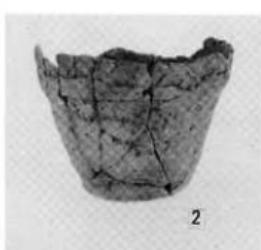
東西道トレンチ（拡張トレンチ付近）



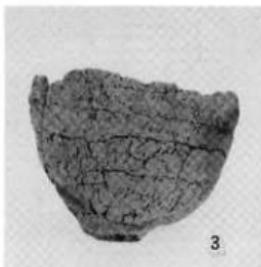
土壤（遺物検出）



1



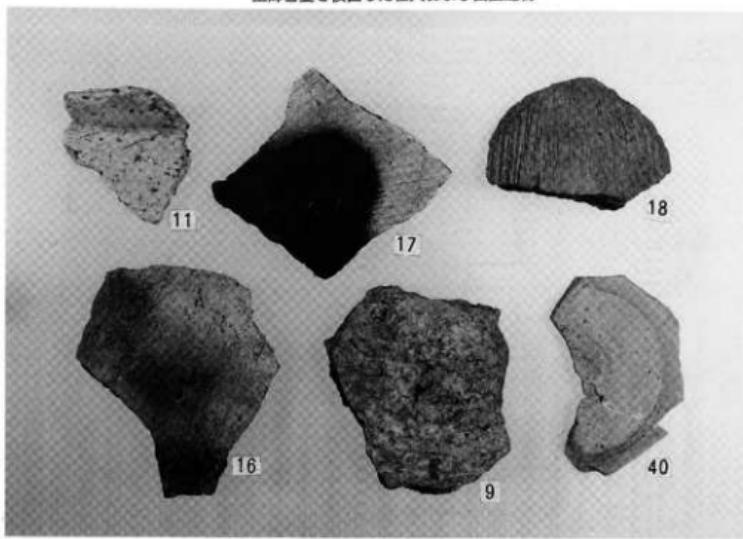
2



3

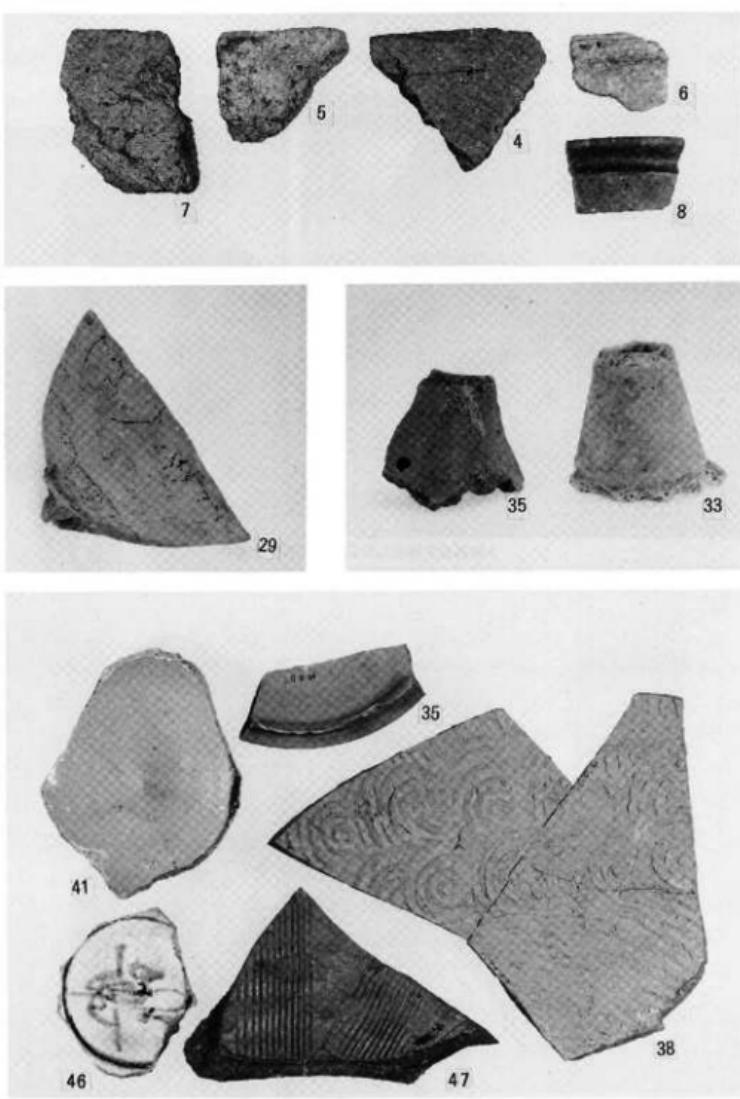


土師器壺を検出した柱穴および出土遺物

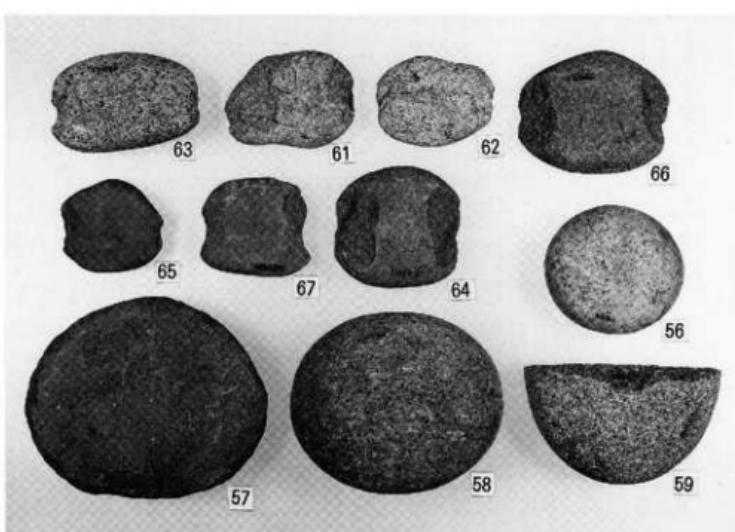
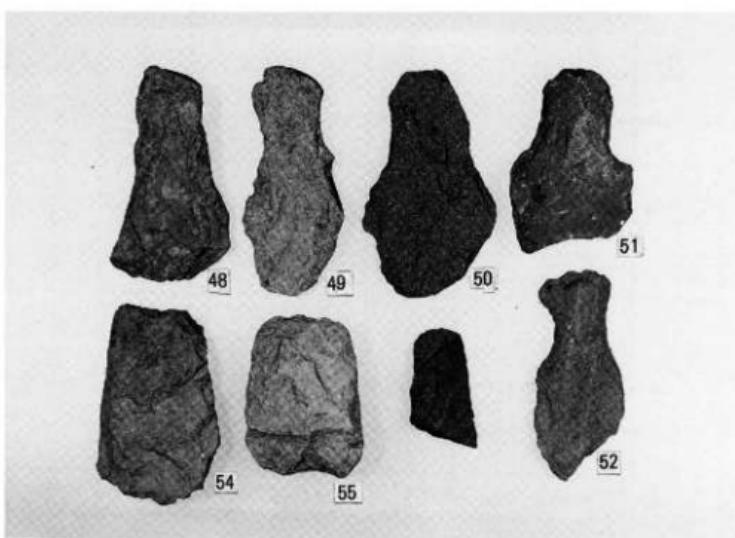


東西道トレンチ出土遺物 (1)

図版
4



東西道トレンチ出土遺物



東西道トレンチ出土遺物

ふなづか
船塚遺跡第Ⅱ・第Ⅲ地点

例　　言

1. 本報告は、宮崎県立芸術劇場及び宮崎県立美術館の建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した船塚遺跡（宮崎市船塚3丁目210番地）の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、宮崎県立芸術劇場予定地域（船塚遺跡第Ⅱ地点）においては、平成元年7月18日から同年10月31日まで、宍戸章（元文化課）が担当して実施した。
宮崎県立美術館予定地域（船塚遺跡第Ⅲ地点）においては、平成2年5月22日から同年7月31日まで、山田洋一郎が担当して実施した。
3. 本書の執筆は、第Ⅰ章1及び第Ⅱ章3を山田洋一郎が、その他を宍戸章が担当した。編集等については、山田洋一郎と宍戸章が行った。
4. 出土遺物については、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章 序説

1. 発掘調査に至る経緯	19
2. 遺跡の位置と環境	20
1) 地理的環境	20
2) 歴史的環境	22

第Ⅱ章 発掘調査の結果

1. 基本土層	23
2. 遺構	29
1) 溝状遺構	29
2) 土壙	32
3. 遺物	35

第Ⅲ章 考察

1. 遺跡の位置と環境について	37
2. 遺構・遺跡の時期について	39

第Ⅳ章 結び

挿図目次

第1図 宮崎市街地周辺地質概要図	20
第2図 遺跡分布図	21
第3図 遺跡位置図	22
第4図 基本土層図 (1)	25
第5図 基本土層図 (2)	26

第6図 造構・遺物配置図	27・28
第7図 SE 1・SE 2断面図	30
第8図 SE 3・SE 4断面図	31
第9図 SC 1・SC 2実測図	33
第10図 SC 3・SC 4実測図	34
第11図 船塚遺跡第II地点遺物実測図	36
第12図 基盤岩等深度線図	37
第13図 沖積層中部層上面等深度線図	38

写 真 図 版 目 次

図版1 第II地点発掘風景・SE 1／南からみたSE 2完掘状況／ 南からみたSE 3完掘状況／西からみたSE 4完掘状況	43
図版2 第II地点SC 1完掘状況／SC 2完掘状況／ SC 3半切状況／SC 4出土状況	44
図版3 第III地点発掘風景／西からみた風景／トレンチ1／トレンチ4	45
図版4 土師器・須恵器／陶器・瓦・摺鉢／寛永通宝／ SC 4出土遺物／第III地点出土遺物	46
図版5 SE 1出土遺物／SE 2出土遺物／ SE 3出土遺物／SE 4出土遺物	47

第Ⅰ章 序 説

1. 発掘調査に至る経緯

宮崎大学の学園都市への移転に伴い、その跡地利用として総合文化公園の構想が具体化されその最初の事業として県立図書館新館の建設が計画された。文化課では、それにともない昭和60年9月2日～9月6日までの5日間試掘調査を実施し少量ながら遺物の出土をみたので昭和61年7月10日～8月13日まで発掘調査を行なった。その結果、5条の溝状遺構が検出され「弥生土器」「土師器」「埴輪」「須恵器」等が少量ながら出土している。

その後「県立芸術劇場」・「県立美術館」の建設が文化課の事業として計画され、「宮崎県立芸術劇場」予定地域においては、平成元年7月18日から4ヶ月を調査予定期間として発掘調査を実施することに決定した。同年4月22日に発掘調査の通知を文化庁長官あて提出した。「県立美術館」予定地域については、平成2年5月22日から3ヶ月を調査予定期間として発掘調査を実施することに決定し、同年5月15日発掘調査の通知を文化庁長官あて提出した。

【調査組織】

船塚遺跡第Ⅱ地点		船塚遺跡第Ⅲ地点	
調査主体	宮崎県教育委員会	調査主体	宮崎県教育委員会
教 育 長	児玉郁夫	教 育 長	児玉郁夫
調査庶務	文化課長 久徳菊雄	調査庶務	文化課長 梨岡 孝
	庶務係長 小倉茂光		庶務係長 小倉茂光
主 査	長友広海	主 査	長友広海
調査担当	埋蔵文化財 係 長 岩永哲夫	調査担当	埋蔵文化財 係 長 岩永哲夫
	主 査 穴戸 章		主 事 山田洋一郎

なお、下記の機関に調査に協力していただいた。記して謝意を表します。

宮崎県学園都市総合文化公園建設局・宮崎県公園協会

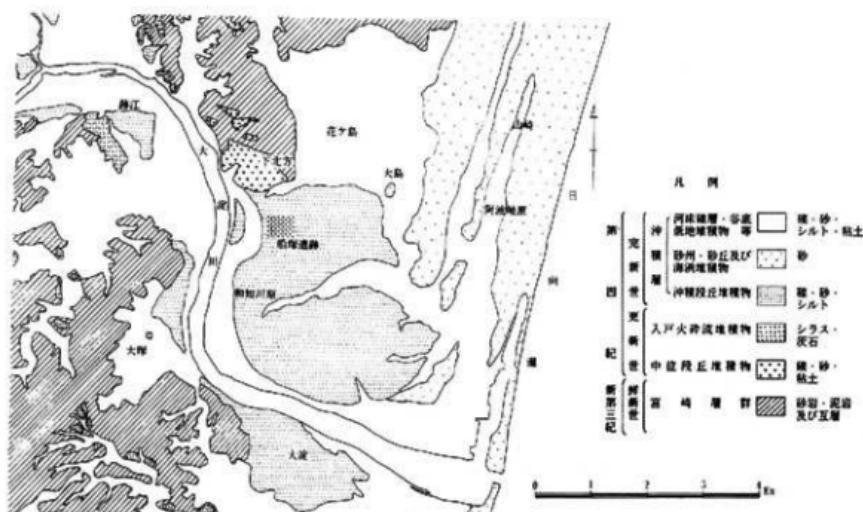
2. 遺跡の位置と環境

1) 地理的環境

船塚遺跡第Ⅱ・Ⅲ地点は宮崎市船塚3丁目210番地に所在する。宮崎大学農学部跡地のうち、第Ⅱ地点は南東端に位置する「県立芸術劇場」建設予定地、第Ⅲ地点は中央部に位置する「県立美術館」建設予定地である(第1図)。

本地域北～北西方には、宮崎層群及びこれを覆う中位段丘堆積物で構成された下北方台地が、比高約20mで南東方向に舌状に張り出している。この台地の南西を画して大淀川が東流し、台地下流から日向灘にかけて、宮崎市街地をのせる広い沖積低地を形成している(第1図)。

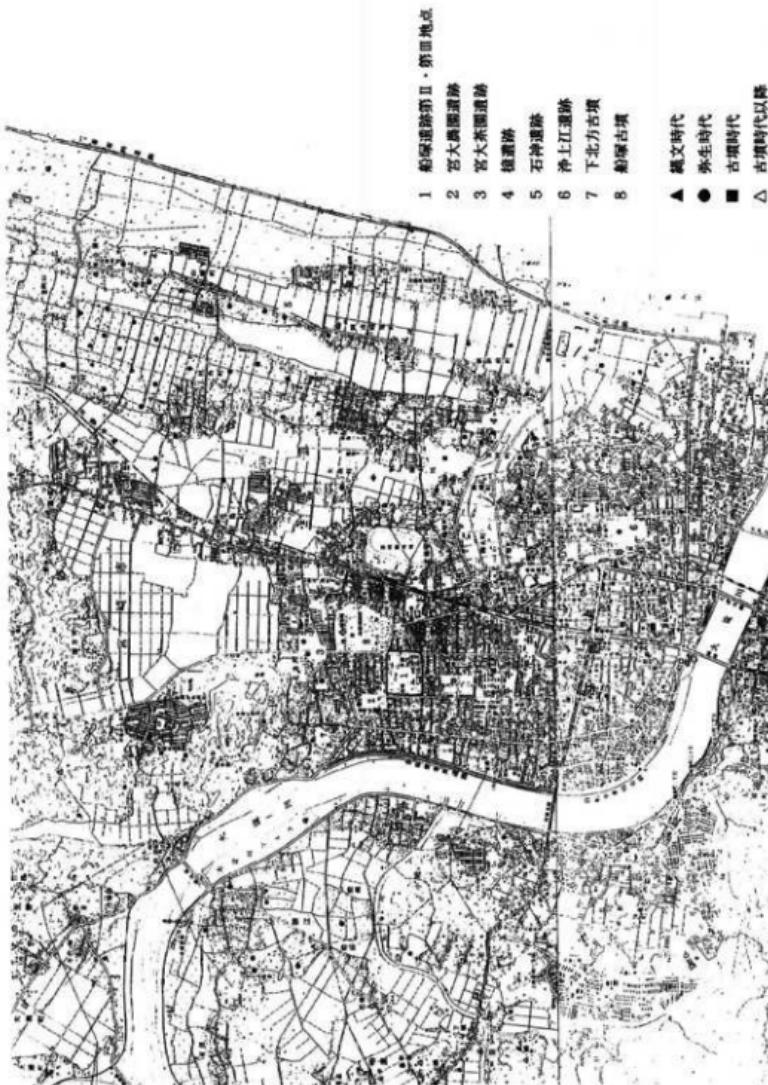
本地域は大淀川左岸の沖積低高地で、昭和61年に調査された船塚遺跡第Ⅰ地点の南側及び南西側に隣接しており、同遺跡が標高8m前後であるのに対し、第Ⅱ地点では標高9m前後とやや高く、第Ⅲ地点は標高7m前後と、他の2地点に比べるとやや低くなっている。



第1図 宮崎市街地周辺地質概要図

※ 木野ほか(1984)を簡略化した。

第2図 遺跡分布図（5万分の1）

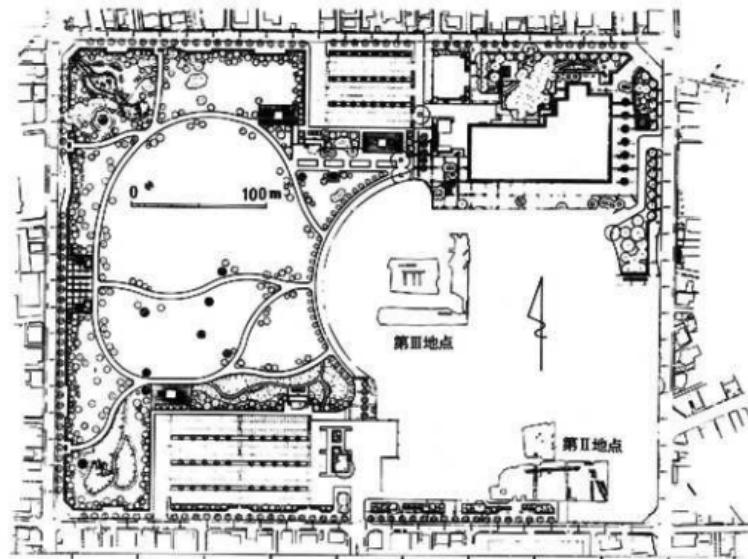


2) 歴史的環境

船塚遺跡第I地点（昭和61年）では、5条の溝状遺構が検出され、ここに流れ込んだと推定される「弥生土器」「土師器」「埴輪」「須恵器」等が少量ながら出土している。これらのことから、同調査報告では、遺構の時期は不明ながら、「弥生土器」片は弥生中期末～後期初頭に、「埴輪」片は5世紀後半にそれぞれ位置付けられている。

一方、宮崎市街地周辺を概観すると、下北方台地上には旧石器時代～古墳時代の遺跡が知られているが、沖積平野においては縄文海進時には海域であったため、海退に伴って順次形成されていった砂丘列上に、弥生前期以降の遺跡の立地が知られている。早くは弥生前期に最も内陸側の砂丘に總遺跡が、中期になると石神遺跡などが、盛んに営まれている。

古墳時代に入ると、旧刑務所跡地の発掘調査で、5世紀代からの浄土江遺跡の実態が明らかになっている。古墳群としては、砂丘列上の古墳群、台地上の下北方古墳群がある。下北方地区は古墳時代以降も歴史的に重要な位置を占めており、近世においては、延岡藩の代官所が置かれるなど、宮崎平野における藩治の中心地であった。（第2図）



第3図 遺跡位置図

第Ⅱ章 発掘調査の結果

1. 基本土層

本遺跡第Ⅱ地点及び第Ⅲ地点の基本土層を第4図・第5図に示す。本地域には宮崎大学農学部の構造物が点在していたため、Ⅷ層にまで至るような深い擾乱も随所に認められる。土層は、I層、II層の大部分が客土の可能性が高く、III層以下がプライマリーな土層である。

I層

第Ⅱ地点では、疊混りの灰色粘性土（I-a層）、黄褐色砂質ブロックを混入する暗褐色粘性土（I-b層）、灰白色砂礫層（I-c層）に細分される。

I-a層は、 $\phi 1 \sim 2\text{ cm}$ の円礫を多量に混入し、発掘区全体の地表部を形成している。I-b層の砂質ブロックは、 $\phi 10\text{ cm}$ 以下が一般的である。厚さ1cm程度の小円礫層を伴うことがある。これらはいずれも造成客土と考えられる。一方、I-c層は $\phi 5\text{ mm}$ 大の砂岩・頁岩・安山岩の円礫で構成され、基質は中～粗粒砂である。黄白色軽石や火山ガラスを含む。疊・砂の粒度は南で粗く、北へ徐々に細粒化しており、河川氾濫に伴う自然の堆積物と考えられる。

第Ⅲ地点では、細粒の褐色砂質土（I-a'層）、より粗粒の褐色砂質土（I-b'層）、細粒の暗褐色砂質土（I-c'層）に区分できる。I-a'層はサラサラして乾燥しやすい。各層とも第Ⅱ地点との連続性は不明である。

II層

第Ⅱ地点では、白斑・茶褐色斑を持つ暗褐色粘性土（II-a層）、鉄分のシミを持つ暗褐～灰褐色土（II-b層）、多量の茶褐色斑を持つ暗褐色～黒褐色粘性土（II-c層）、茶褐色斑を持つ暗褐色粘性土（II-d層）で構成される。

II-a層は下部に $\phi 1 \sim 8\text{ cm}$ 大の小円礫を伴うことがある。II-b層は粘性の低い土層で、上は濃色、下部へ淡色化し、下部ほど鉄分のシミも多く固くなる傾向を持つ。小円礫を散点的に混入することがある。II-c層は多量の茶褐色斑によりザラザラした感があり、潤滑状態では上下に比べて黒っぽいが、乾燥すると、灰白色で固くブロック状となる。本層は主に第Ⅱ地点内の北部区域にのみみられる。II-d層は上下へ漸移的なことが多い。南部区域では上部に灰白色軽石を混入することがある。

第Ⅲ地点では、上位より粗粒の暗褐色砂質土（II-a'層）、細粒の暗褐色砂質土（II-b'層）、粗粒の暗褐色砂質土（II-c'層）、粗粒の淡褐色粘性土（II-d'層）に区分される、II-a'層は比

較的粒度が揃っている。II-b'層はサラサラしているが水分を含みやすい。II-c'層はザラザラした感がある。II-d'層は水分をよく含む。

III層

第II地点でのIII層は、明褐色～淡黄褐色の粘性土で、締まりがよく、乾燥すると乾裂を生じる。褐色の地に暗褐色部が雲状に入ることがある。北方へ細粒化の傾向があるとみられ、第III地点では黄褐色の粘土となっている。

IV層

両地点とも暗褐色の粘性土で、第II地点では紫黒色味を帯びることがある。粘性はそれ程強くはないが緻密である。

V層

第II地点でのV層は、黄褐色砂質土～淡黄褐色粘性土で、北部のものほど細粒化傾向にあり、粘性も強くなる。全般的に締まりがよい。

第III地点ではやや粗粒の黄褐色粘土であるが、粘性は低い。

VI層

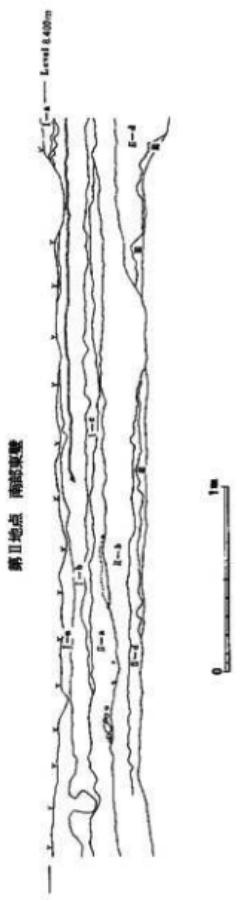
第II地点でのVI層は黄褐色砂質土である。下部では黄色味を増し、黄橙色に近くなり、砂質も強まる。北部へ細粒化の傾向があり、帶紫褐色～黄褐色砂質粘土へと移化する。灰褐色シミ様のマンガン斑を伴うことがある。

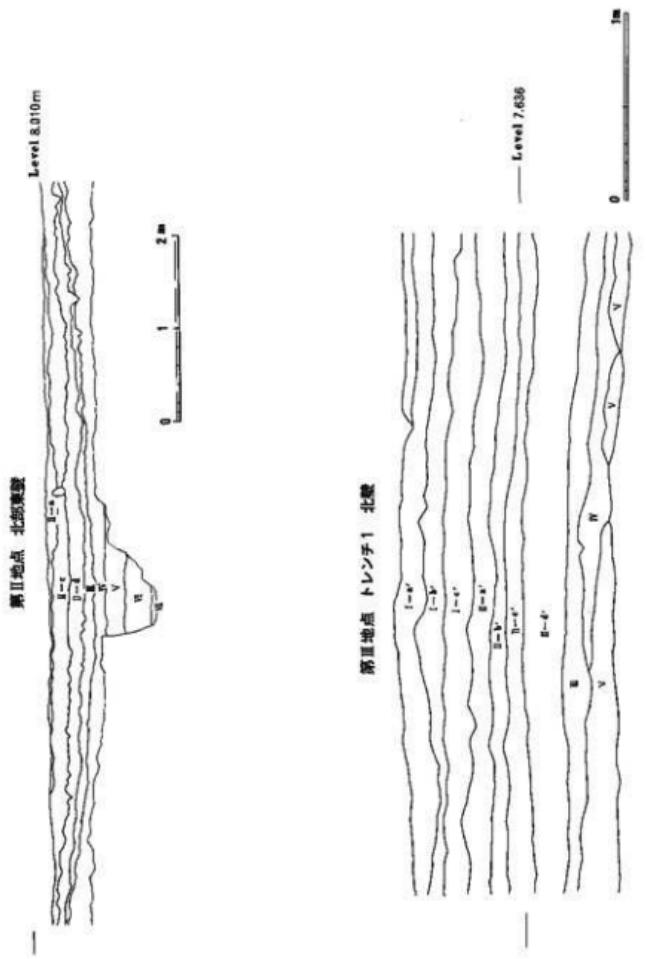
第III地点ではVI層以下は黄褐色砂層となっている。

VII層

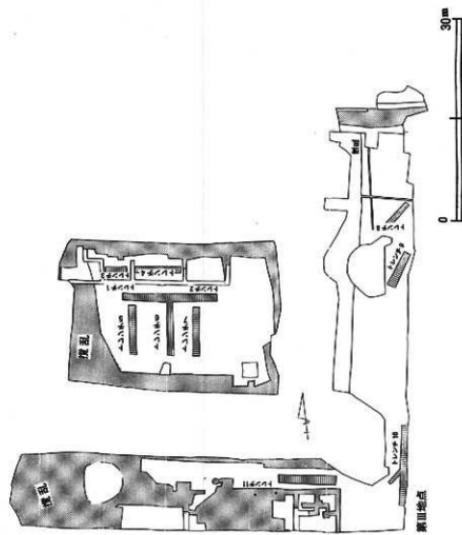
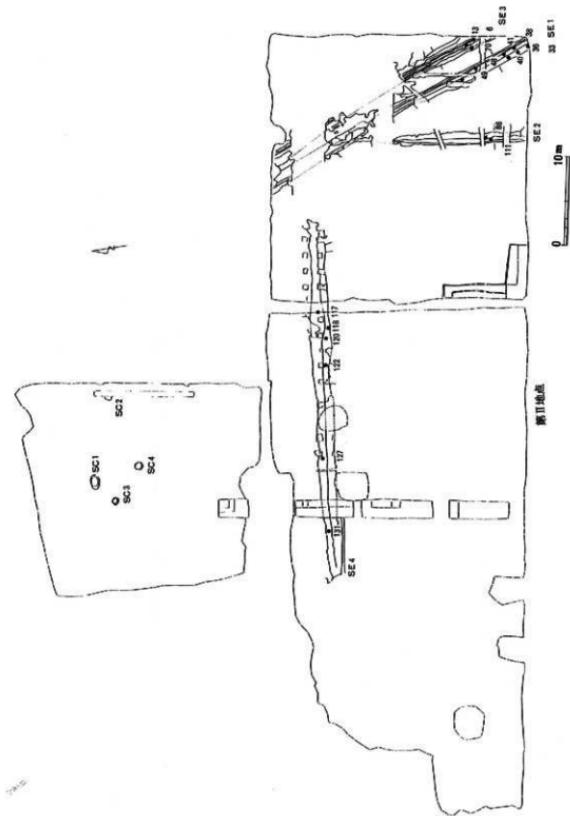
第II地点ではVII層に黄褐色砂層～砂疊層がみられる。火山ガラスを多量に含有し、キラキラする。本層はφ 1cm大の小円疊を伴うが、北部へ向かって細粒化し、褐色の含疊砂質粘土へと移化する。

第4圖 基本土層圖 (1)





第5圖 基本土壤圖 (2)



第6図 遺構・遺物配置図

2. 遺構

先述のように、本調査地域の北～北東側隣接地域については、既に発掘調査が行われ、弥生～古墳時代の遺物が確認されていたため、第Ⅱ地点については位置決定のため、数点の試掘を行った後、約2600m²の面的発掘調査を行った。第Ⅲ地点では、約4000m²を重機で表土剥ぎした後、プライマリーな層が残っていると思われる部分に11か所のトレンチを設定して調査した。この結果、第Ⅱ地点では溝状遺構と土壤が検出されたが、第Ⅲ地点では特別な遺構は検出されなかった。

第Ⅱ地点で今回検出された遺構のうち、溝状遺構は明らかに近時の宮崎大学関係の擾乱部に切られながらも、南北方向に3条、東西方向に1条の計4条が確認された。土壤は溝状遺構の北西方向に4つ確認された。これらの遺構はいづれもⅢ層上面で検出された（第5図）。

1) 溝状遺構

SE 1（第6・7図）

発掘区南東端より北へ延びる、幅約1.5m、深さ約20cmの溝である。途中宮崎大学木館跡の擾乱部によって途切れながらも、延長は約35m確認できる。

断面は西側が緩く、東側が急な船底型を呈する。埋土は茶褐色斑を持つ暗褐色粘性土で、粒度が細かく緻密な感がある。褐色粘性土の1cm大の小ブロックを混入し、とくに底面傾斜の緩い西半部で小ブロックの混入量が多い。

遺構に伴う遺物としては、土師器11点、陶器3点、瓦片2点などが出土した。このうち、土師器はいづれもローリングを受け、径は1cm前後の小さなものが多い。

SE 2（第6・7図）

発掘区南端より北へ延びる、幅1～1.5m、深さ約10cmの浅い溝である。約16m延長したのち、幅約2.5mの擾乱部によって一旦途絶える。この北方延長と考えられるものが再び認められる地点では、SE 1と切り合っている。しかし、両溝の埋土の区別がつかず、埋土と遺構との境界が不明瞭で、区分が曖昧となつたこともある、両者の関係は分からなかった。また、SE 2自体の延長状況も、一部にSE 2西縁部と考えられる境界が確認できたにとどまった。

断面は西側が急で東側が緩い、緩やかな船底型を呈する。埋土はⅡ層に類似した、茶褐色斑のある暗褐色粘性土で、褐色上の小ブロックを混入するほか、5mm大の暗灰褐色スコリア（新燃岳スコリア）を散点的に含有する。ときに溝底境界が不明瞭となる。

遺構に伴う遺物としては、土師器7点、陶器2点などが出土した。土師器はいづれもSE 1と同様、ローリングを受けた小さなものが多い。

SE 3 (第6・8図)

SE 1にはば平行して、発掘区南東端より北へ延びる、幅1.5~2m、深さ約40cmのやや深い溝である。擾乱部によって途切れながらも、延長は約30m確認できる。

断面は中間に緩傾斜部があり、中央部が一段深くなった、下向きの凸型を呈している。埋土は茶褐色斑を持ちザラツキのある暗褐色粘性土で、褐色土の小ブロックを混えるほか、 ϕ 5mm大の暗灰褐色スコリア（新燃岳スコリア）を含有する。スコリアは溝の中～上部付近に多く、下半分には認められない。

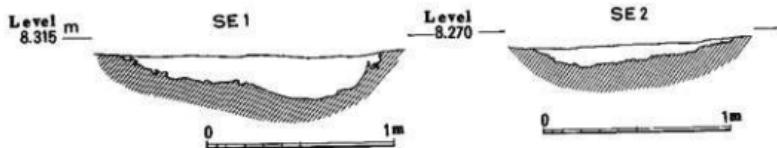
遺物は、土師器30点、須恵器1点、陶器12点、瓦片1点、錢貨1点などが出土した。土師器、須恵器はいづれもローリングを受けている。

SE 4 (第6・8図)

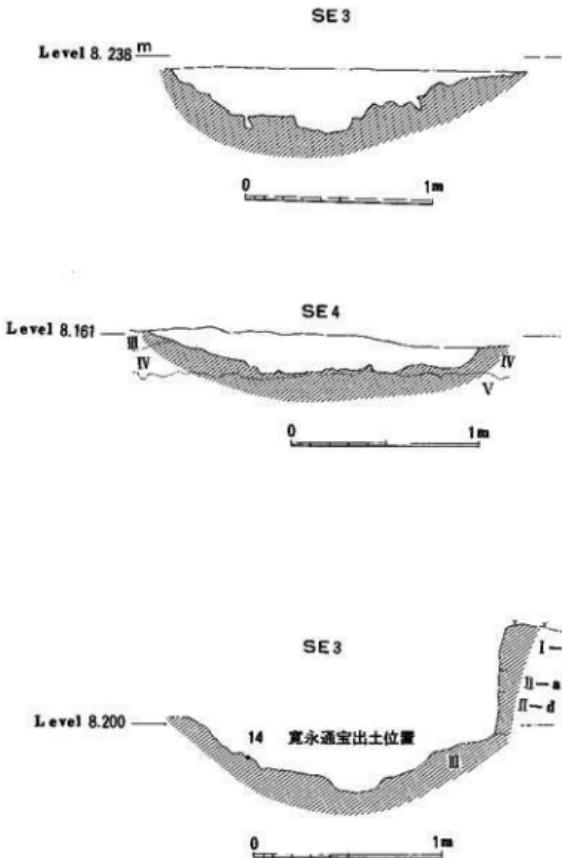
発掘区中央を東西に延びる、幅2~2.5m、深さ約20cmの溝である。西端・東端とも、擾乱部によって途絶える。確認された延長は約40mである。

断面は緩やかな船底型を呈する。埋土は茶褐色斑を持つザラツキのある暗褐色粘性土で、全体的に ϕ 5mm大の暗灰褐色スコリア（新燃岳スコリア）を含有する。

遺物は、土師器10点、須恵器2点、陶器8点などが出土した。土師器、須恵器はいづれもローリングを受けているが、径2~3cmで他の溝のものに比べるとやや大きいものが多い。



第7図 SE 1・SE 2断面図



第8図 SE 3・SE 4断面図

2) 土壌

SC 1 (第6・9図)

平面形は長径約160cm、短径約120cmの卵型を呈する。断面は緩い船底型で、深さ約25cmである。埋土は茶褐色斑やスコリア粒を多く含有しザラツキのある暗褐色土で、下部7cmほどは褐色粘性土の小ブロックを多く混入する。遺物は認められなかった。

SC 2 (第6・9図)

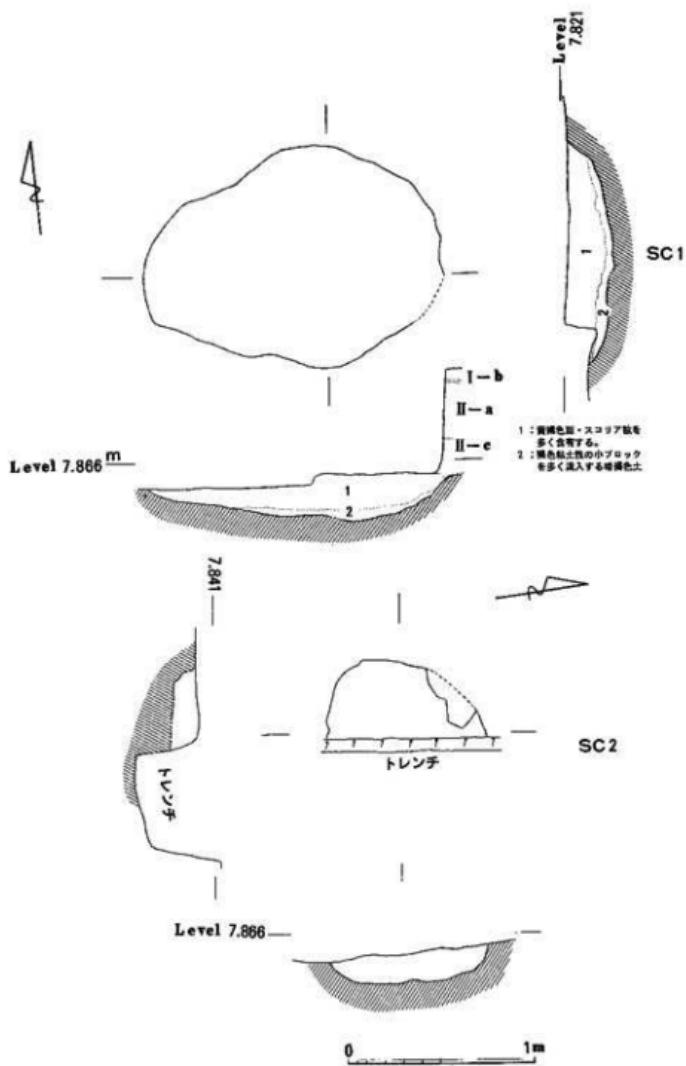
平面形は径約85cmの円型を呈するとみられるが、東半部はトレンチによる削除で不明となっている。断面は緩い船底型で、深さは約25cmである。埋土は茶褐色斑やスコリア粒を多く含有しザラツキのある暗褐色土で、下部7cmほどは褐色粘性土の小ブロックを多く混入する。遺物は認められなかった。

SC 3 (第6・10図)

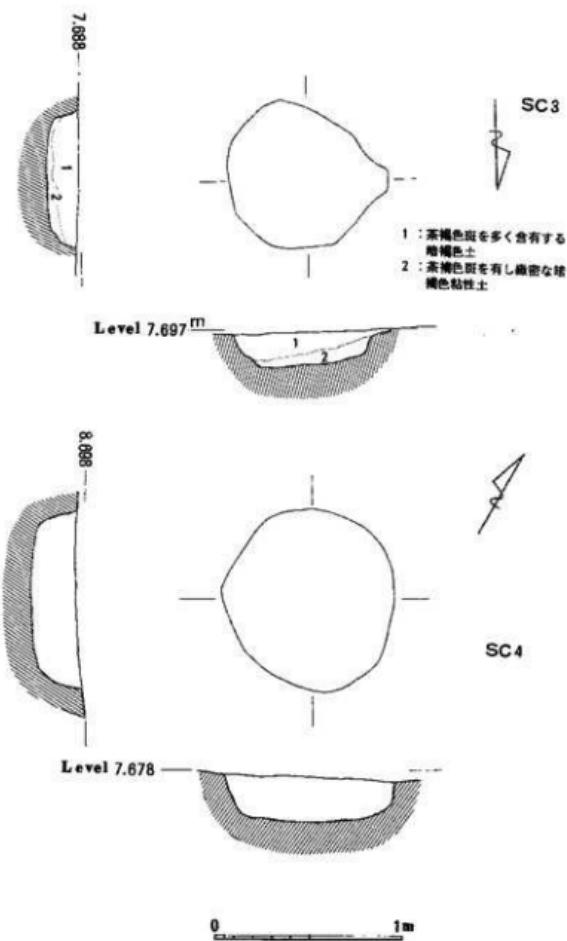
平面形は長径約85cm、短径約80cmで、西側が少しくびれた西洋梨型を呈する。断面は側壁が急斜し、深さ20cm弱の鍋底型である。埋土は上部では茶褐色斑を多く含有しザラツキのある暗褐色土で、下部5~8cmは、同様の暗褐色土ながら、上部に比べ粘土質を増して、ややしっとりした感がある。なお、下部層にはφ4mm大の黒褐色スコリア（高原スコリア）の亜円礫が混入している。上下の境界面は多少の凹凸はあるものの、全体としては西北から南東方向への緩い傾斜を持っている。遺物は認められなかった。

SC 4 (第6・10図)

平面形は長径約100cm、短径約93cmで、ほぼ円型を呈する。断面は側壁が急斜する深さ約25cmの鍋底型である。埋土は全般に茶褐色斑を多く含有しザラツキのある暗褐色土である。区分できるほどの違いはないが、下部ほど粘土質を増す傾向がある。スコリアの混入状況も判然としないが、黒褐色スコリア（高原スコリア）の亜円礫が全体的に混入しているのに対し、上部10cm位の部分には、φ1cm大のやや角張った暗灰褐色スコリア（新燃岳スコリア）が混入している。横底より約10cmの位置で、ローリングした土師器1点が出土した。



第9図 SC1・SC2実測図



第10図 SC3・SC4実測図

3. 遺物

遺物の出土状況は、両地点とも希薄であった。特に第Ⅲ地点では、土師器の小片が2つのみであったので、ここでは第Ⅱ地点の遺物について考察してみたい。遺物の種類は、土師器・須恵器・陶器・瓦・摺鉢・錢貨である。遺物の時期は、弥生時代～江戸時代初期と、かなりの時代幅がある。

土師器（第11図-1・2・3）

第Ⅱ地点表土出土の1は底部で、底径は推定約6.9cmである。ナデが施されているが、調整不明のところがある。かなり風化している。SE4出土の2は、口縁部から胴部にかけてのもので、器高の低い碗である。胎土はかなりきめ細かい。第Ⅱ地点出土の3は底部で、傾きからみて2と同様に、器高の低い碗のようである。

須恵器（第11図-4・5・6）

第Ⅱ地点出土の4は、胴部と思われるが、傾きは判定できず、ヨコナデ調整を受け、外側に浅い細線を持つ。SE3出土の5は、口縁部から胴部にかけてのもので、蓋と思われる。SE4出土の6は、底部と思われるが、胴部が残っていない。ナデ調整が施されている。

陶器・瓦（第11図-7・8・9・10）

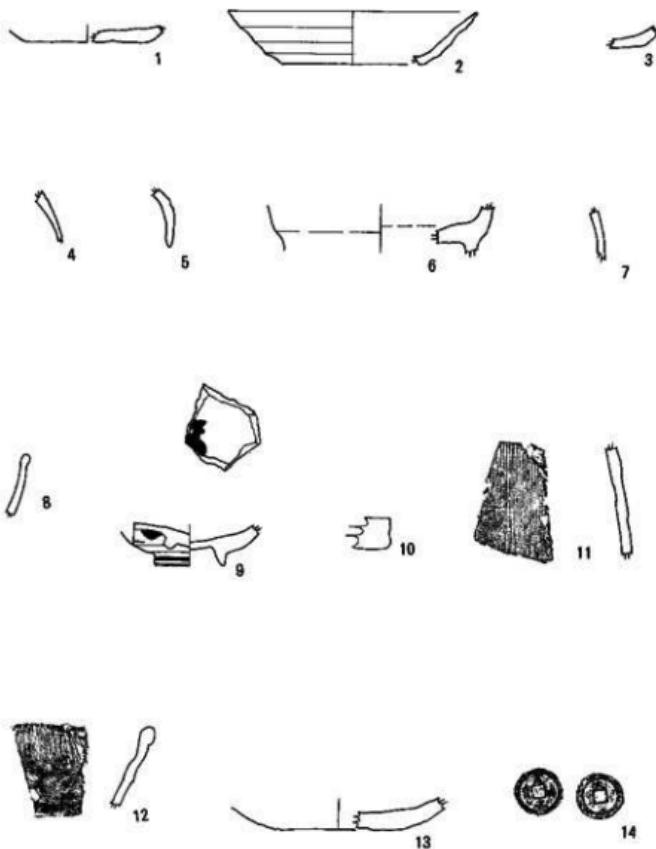
SE2出土の7は胴部で、灰白釉の買入が施されている。SE2出土の8は、口縁部で丸みを帯びている。オリーブ褐色の釉が施されている。第Ⅱ地点表土出土の9は底部で、底径3.6cmである。買入釉を施した白色の染付である。SE1出土の10は瓦で、ヘラ切りとナデ調整をしている。胎土には径1mm以下の茶褐色斑および石英・斜長石・火山ガラスが含まれている。

摺鉢（第11図-11・12・13）

11は胴部で、ヨコナデを施し、裏側にはやや斜め方向の茶線が施されている。12は口縁部で、11の上部に相当すると思われる。13は底部で、底径5.9cmである。ヨコナデを施している。11～13はSE4出土である。

錢貨（第11図-14）

14は寛永通宝で、背面に「文」の字を有する、いわゆる文銭である。寛永通宝は、古寛永・文銭・新寛永・寛永鉄銭に区分され、それぞれの鋳造年代は、寛永13年（1636）・寛文8年（1668）・元禄10年（1697）・元文4年（1739）とされている¹²⁾。



SE 1 10
 SE 2 7・8
 SE 3 4・14
 SE 4 2・6・11～13

0 10cm

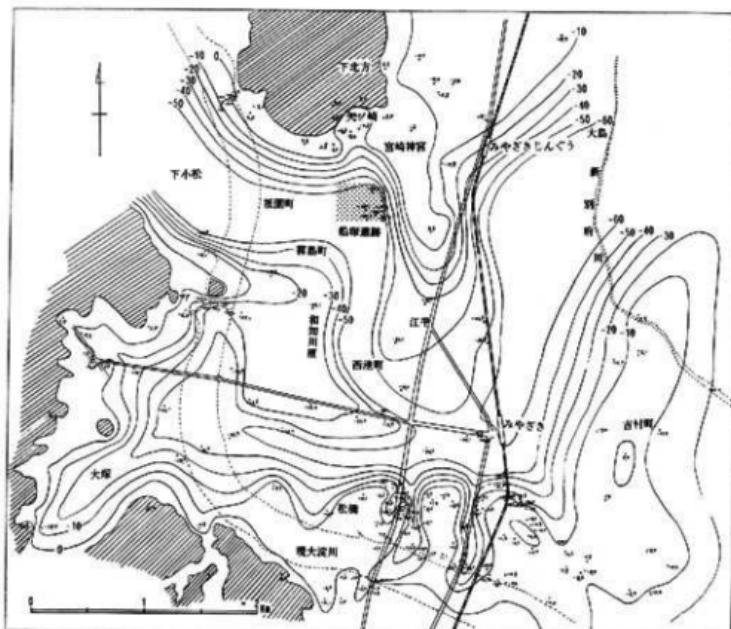
第11図 船塚遺跡第Ⅱ地点遺物実測図

第III章 考 察

本地域のうち、第Ⅲ地点については得られた遺物が余りにも少量であったため、ここでは第Ⅱ地点での観察結果等を基に、船塚遺跡全体についての考察を行った。

1. 遺跡の位置と環境について

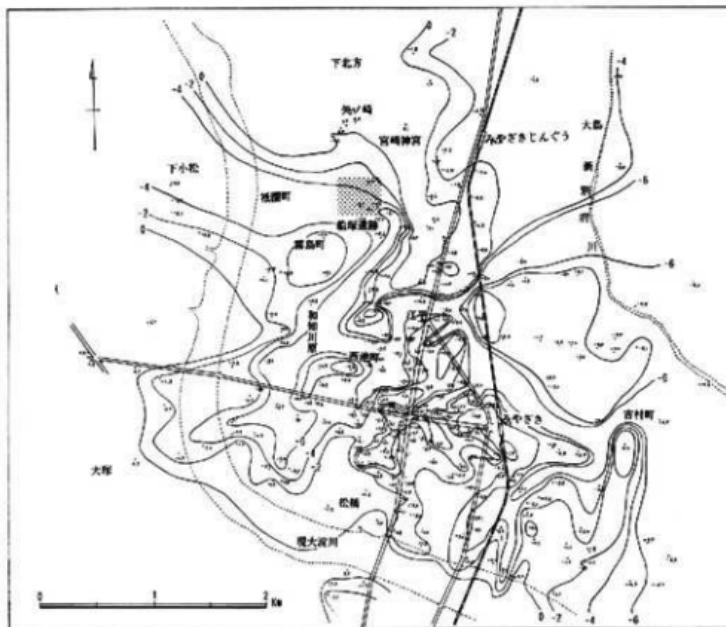
本調査地域周辺のいくつかの地点における既存のボーリング資料⁽¹²⁾等をもとに、沖積低地の地下状況を知るため「基盤岩等深度線図」を作成した（第12図）。本地域での地質基盤は新第三紀の宮崎層群である。ボーリング資料によれば、本地域の沖積層は下部層、中部層、上部層に区分され、それぞれ砂礫層、シルト～シルト質砂層、砂層～砂礫層を主体としている。このうち、



第12図 基盤岩等深度線図
等深度線間隔は10m (SLで表示)、斜線部は基盤岩類露出地域

中部のシルト～シルト質砂層は貝殻を混入する海成層で、繩文海進に伴う堆積物と考えられる。そこで、その後の海退時における河川位置の変遷を知るために、この「沖積層中部層の上面」の等深度線図も併せて作成した(第13図)。

第12図はいわば最終氷期における本地域の地形の概要を示していることになる。霧島町へ和知川原付近には-30mの、松橋～吉村町にかけては-10mの埋没段丘が認められ、これらの台地～丘陵を削剥して、大小の河谷が流下していたのであろう。古大淀川は現在とはその流れが大きく異なり、祇園町付近から東に向かう河谷を形成していたと推定される。一方、下北方台地から現宮崎神宮敷地にかけての南東延長方向には、基盤の高まりが予想され、旧河谷はこの丘陵にぶつかって、南へ大きく蛇行しながら現在の宮崎駅付近を通過し、大島・阿波岐原町方面へと流下していたものと考えられる。そして、船塚遺跡はまさにこの基盤の凹部（旧河谷）上に位置している。



第13図 沖積層中部層上面等深度線図
等深度線間隔は2m(SLで表示)

また、第12図と第13図を比較すると、基盤の形態はその後の地形形成にまで影響を与えていくようにならう。第13図の当時、市街地一帯は自然堤防地帯として、河川は蛇行して自然堤防や後背湿地が形成されていったと思われる。この時代においても、メインとなる旧河道は船塚遺跡付近で蛇行を開始し、和知川原～西池町～江平へと通過していたものと考えられる。この河道は日豊線付近で分流すると共に、河口部に砂州や砂丘を形成しつつ前進していくものと推定される。

既存ボーリング資料によれば、沖積層上部層のうち、船塚遺跡では疊混じり砂層が発達し、神宮敷地付近では砂質層が、矢ノ崎付近では泥質層が卓越している。このことからも、縄文前期中葉の最大海進以降、海が徐々に退いて冲積低地が形成される過程において、船塚遺跡付近が河道の中心となり、基盤の高まり位置に当る神宮敷地付近には、これに引っ掛かるようにして早くから砂州状の砂質堆積物が堆積し、基盤の谷に当る矢ノ崎付近では、後背湿地として泥質堆積物が堆積したのではないかと推定される。

つまり、船塚遺跡周辺の沖積平野部においては、人が生活できる状態の土地は、最初に神宮敷地付近に形成され、後に船塚遺跡や矢ノ崎付近も陸化が進んだと考えることができる。そして、古い生活遺跡ほど地盤のしっかりとした微高地である神宮敷地付近に立地し、船塚遺跡や矢ノ崎付近ではかなり新しい時期まで、少なくとも、旧大淀川が現在の位置近くに移動するまでの間は、人の生活（居住）しにくい河川氾濫原もしくは湿地のような状態があったのではないかと推定される。このことは、ボーリング資料のほか、第II地点南端でのVI層黄橙色砂質土が北へ細粒化し、第II地点の北端では褐色粘土となることなどからも伺い知ることができる。

第II地点 I 層下半部にみられる軽石・火山ガラスを混入する層厚数cmの中～粗粒砂層（I-c層：第II地点南東端）の粒径が、北方へ細粒化するとともに、層自体も北へ尖滅することからは、ごく最近においても河川の氾濫により南から北への堆積物の供給が行われていた…北側ほど湿地的傾向にあった…ものと考えられる。

2. 遺構・遺跡の時期について

第II地点の4条の溝状遺構では、肉眼的に「新燃岳スコリア」と同定される暗灰褐色（時に緑味を帯びる）スコリアが埋土中にみられる。SE1、SE4ではその層準は判然としないが、SE2では溝底より約15cm上位に、SE3でも溝面近くに特に集中する傾向がある。スコリアはSE2溝底では直徑2cm程度の大きなものが幾つかみられたが、一般には直徑5mm程度で粒度がそろっており、割に角張っている。このことから、これらのスコリアは多少の水運はあったにせよ、降下物として、宮崎市付近にまで達し、溝状遺構はこの時期に完全に埋没したものと考えられる。

新燃岳スコリアの噴出時期は1716～1717年のこととされており¹³⁾、SE3でスコリア集中層

準直下から「寛永通宝（文銭）」が出土したこととも矛盾しない。溝状遺構の遺物をみると、SE 4 ではかなりローリングを受けた土師器・須恵器のほか、殆ど角張った明らかに近世とみられる陶器片が認められる。SE 2・SE 3 についてもこの傾向があり、これらのことから、溝状遺構はすべて近世のものとみなし得る。

土壤が検出された地区では、土層断面において II 層下底部が緩く下に捲んだ形状をなし、II 層が厚くなる中央部では詳細にみれば、上部には暗褐色土の II-a 層、中間部にザラザラした暗褐色土の II-c 層、下部はザラザラ感のない暗褐色粘性土の II-d 層とに区分できる。II-c 層の中は下方粗粒化等の顕著な堆積構造は認められず、むしろ過去の擾乱によって均質化されたような感があり、ザラザラ感の原因は、団粒構造のようなものと思われる。土壤は III 層上面で検出され、平面的には II 層の最厚部（III 層の凹部中央）付近…自然地形の小谷間…に位置する傾向がある。

一方、土壤の埋土も II-c 層に類似したザラザラ感をもつが、色はやや黒味の少ない暗褐色土である。埋土の状態は SC 2 では判然としないが、SC 1 では下部に褐色粘性土塊を多く混入する部分がある。SC 3 では、上下でザラザラ感の程度が変わり、上部ほどザラザラ感が強い。下部層の状態からは、北西から南東への土砂流入が考えられる。SC 4 でもザラザラ感の程度が変わることもあるが、壙は不明瞭で敢えて区分できるほどではない。この埋土のザラザラの中に、直径 4 mm 以下でかなり粒径が揃っているものの、円磨された黒褐色スコリアが認められる。この黒褐色スコリアは肉眼的には「高原スコリア」とみられ、埋土の全体に混入している。

また、土壤埋土には「新燃岳スコリア」も認められる。新燃岳スコリアは SC 1、SC 4 で観察したかぎりでは、上半部には混入するが、下半部にはみられない。SC 4 での同スコリアの混入層準は、遺物より上方のみである。

以上のことから、土壤の存在する地区的歴史を略述すると、次のように考えられる。

- 1) III 層の形成する自然の緩い凹凸地形を、「高原スコリア」を混入した氾濫原堆積物（泥質土）が埋積した。 ……西暦 788 年以降のある時期
- 2) II 層（II-c 層）を表土とする農地？の時代。最後まで低かった位置に何等かの掘削が行われた。 ……土壤の形成
- 3) 周辺からの土砂流入により、土壤の下半部は埋没、土器片が混入した。
- 4) 新燃岳スコリア降下 ……西暦 1716～1717 年
- 5) 土壤の上半部埋没 ……土壤の消滅

すなわち、本地域の遺構は、溝も土壤も江戸前期に埋没・消滅したもので、掘削の時期は特定できないが、SC 1 や SC 3 で若干の埋没間隙が認められる以外、特別な堆積構造等も認め難い

ことから、それ程長く存在したものとも思えない。また、遺構に伴う遺物のうち、土師器片等については、これらの遺構が形成された当時近隣に存在していた遺跡が、田畠の拡大等の開発によって破壊され、当該遺構へもたらされたものとの解釈も成り立つ。そうすると、北側隣接地域の船塚遺跡第Ⅰ地点（昭和61年）で出土した埴輪等の意味も、同様のことが言えるように思われる。本地域の遺構に伴う遺物の中には、ローリングをうけたものがかなりあることからも、この方が解釈としては妥当ではないかと思われる。

第IV章 結 び

船塚遺跡の調査は昭和61年の第Ⅰ地点に始まり、平成元年の第Ⅱ地点、平成2年の第Ⅲ地点と順次進められ、遺構・遺物にとぼしい状況でありながら、当該地域の歴史を考える上で、重要な役割を担うことになった。

出土した遺物が、大きな時代幅を有するという事実は、弥生時代以降長い時間の経過の中で、本地域がいかに歴史的に重要な地域であったかを物語っている。また、自然環境の変化と人々の生活との係わり合い、あるいは生活範囲の拡大と環境の変更といったことについても、今回の調査は大きな指針を与えてくれた。地域の歴史を解明する上で、このような視点は欠かすことのできない問題であろう。今後は、自然の変化状況等も視野に入れた発掘調査を行い、歴史を解き明かしていくことが、我々に与えられた課題であると考えられる。

註

1：桜木晋一（1990）前畠遺跡の出土銭貨と鹿児島県下の出土六道錢、一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書（Ⅲ）前畠遺跡、鹿児島県教育委員会、による。

2：宮崎市発行「宮崎市地盤図」（1979）を基に、県立ホール（仮称）建設工事に伴う地質調査、図書館新館建設工事に伴う地質調査、大淀川水管橋ボーリング調査、等のボーリング資料及び穴戸の未公表資料を加えて作成した。

なお、大淀川旧流路については、外山秀一（1982）『大淀川下流域における古環境の復原』（立命館文学、第446～447号）では人塚付近から宮崎駅方面への埋没谷が示された。

仁田脇一秋（1992）『宮崎市街地の地盤図改訂へ向けての2、3の考察』（宮崎応用地質研究会、めらんじゅ第3号）では、下北方から山崎方面への埋没谷が予想されている。

3 : 沢村孝之助・松井和典 (1957) 5万分の1地質図幅「霧島山」及び同説明書。地質調査所、58p.による。

【引用・参考文献】

木野義人・影山邦夫・奥村公男・遠藤秀典・福田理・横山勝三 (1984) 宮崎地域の地質、
地域地質研究報告 (5万分の1図幅), 地質調査所, 100p.

北郷泰道 (1987) 宮崎大学跡地遺跡発掘調査報告書 I 「船塚遺跡」, 宮崎県教育委員会。

宮崎市教育委員会 (1990) 宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書 II

〔リゾート地区を中心として〕

1 地図

西からみたSE 4 完壁状況



南からみたSE 2 完壁状況



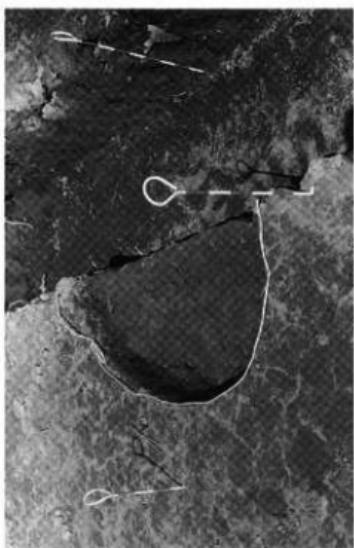
第II地点発掘風景・SE 1



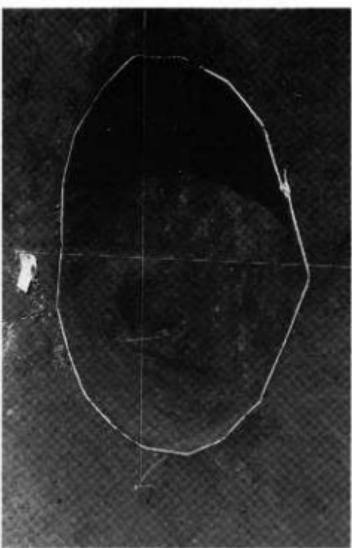
南からみたSE 3 完壁状況



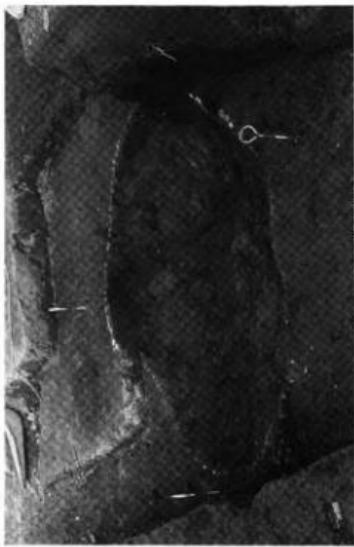
图版 2



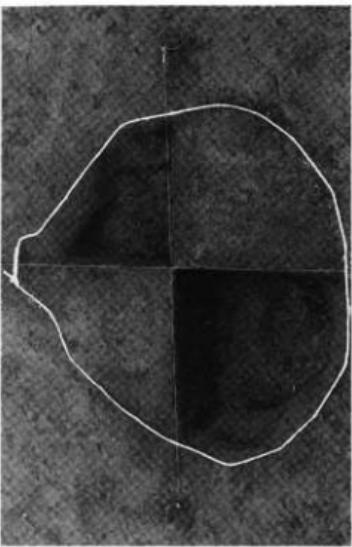
SC 2 先期状况



SC 4 出土状况



第 II 地点 SC 1 先期状况



SC 3 半切状态

図版3

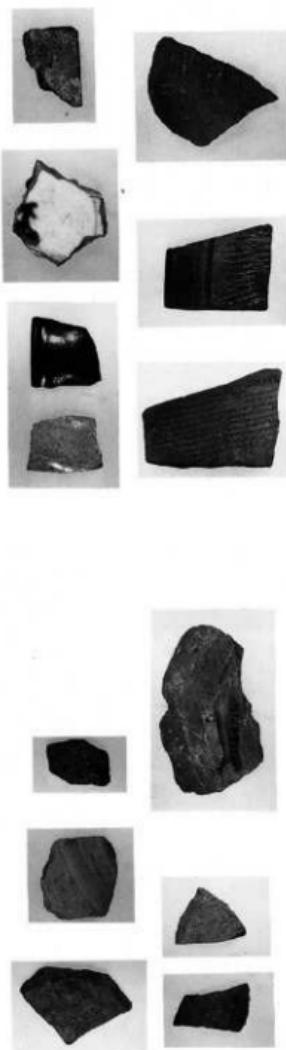


トレンチ4



トレンチ1

圖版 4



土面芯・漆面物

陶器・瓦・筒瓦

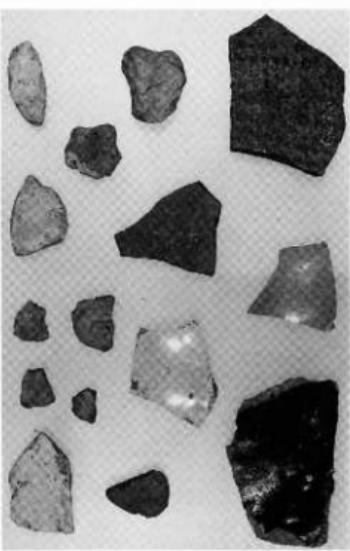


(左) 宽永通宝

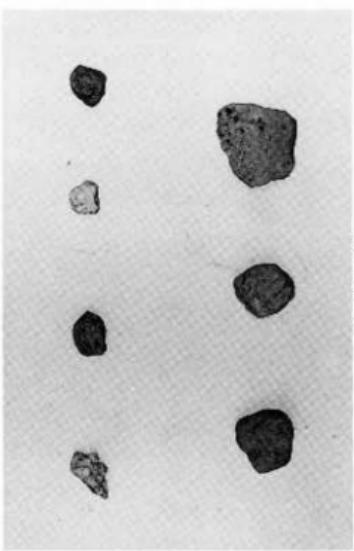
(右) 宽永通宝

SC 4 出土物

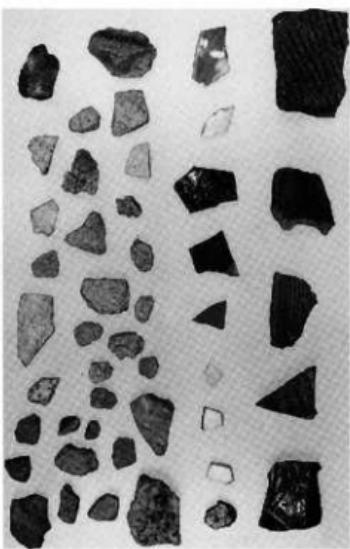
SE 4 出土遺物



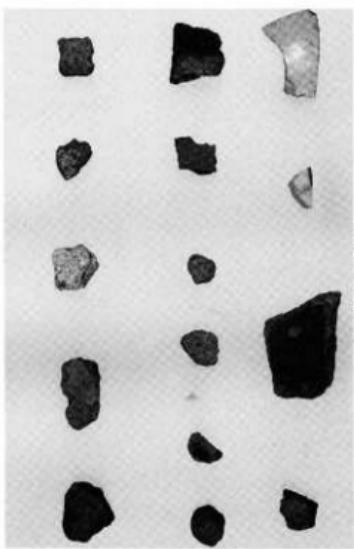
SE 2 出土遺物



SE 3 出土遺物



SE 1 出土遺物



こ はん だ こ ふん
小 半 田 古 墳

例　　言

1. 本報告は、主要地方道竹田五ヶ瀬線道路改良工事に伴い昭和62年5月22日から7月1日にかけて県教育委員会が実施した小半田古墳の発掘調査報告である。
2. 本報告の執筆・編集は県教育庁文化課埋蔵文化財係主査北郷泰道が行った。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	50
第1節 遺跡の位置と環境	50
第2節 調査に至る経緯	50
第Ⅱ章 調査の結果	50
第1節 発掘調査の経過	50
第2節 調査の結果	51
第Ⅲ章 まとめ	51

挿図目次

第1図 遺跡位置図	49
第2図 小半田古墳地形測量図及びトレンチ設定図	52
第3図 小半田古墳トレンチ土層図	53

図版目次

図版1 古墳全景・Aトレンチ土層の状態	54
図版2 Bトレンチ土層の状態・Cトレンチ土層の状態	55



第1図 遺跡位置図

(S = 1 / 50,000)

1. 下赤谷横穴墓
2. 小半田古墳
3. 丸塚(子侍勾玉出土地点)
4. 広木野横穴墓

第Ⅰ章 はじめに

第1節 遺跡の位置と環境

小半田古墳は、宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町大字桑野内字小半田2600番地に所在する県指定史跡三ヶ所村古墳3号墳の通称である。前方後円墳として指定を受けているが、指定理由は戦前同地において勾玉が表採されたことと、地形の形状による判断であろう。後に述べるように、現状では明確な前方後円墳と判断することはできない。

五ヶ瀬町内における遺跡の状況は、まだ不明な部分が多く、正式な発掘調査の結果ではないが、占くは本古墳の南約6kmの広木野横穴墓から鉄鎌などの副葬品の出土が、また桑野内と赤谷から子持ち勾玉の出土が知られているにすぎない。

しかし、近年幾つかの発掘調査が実施されるようになり、平成元年には下赤谷で2基の横穴墓が、平成4年には広木野で6世紀代の須恵器を伴う古墳時代の住居跡が検出されている(第1図)。

第2節 調査に至る経緯

西臼杵支庁では、主要地方道竹田五ヶ瀬線の改良工事を計画し、昭和59年度から継続して工事を実施してきたが、昭和62年度工事予定地に県指定史跡三ヶ所村古墳2号墳の指定地番が含まれることから、文化財の取り扱いについて文化課に協議がなされた。

文化課では、昭和61年3月に現地立合調査を実施したが、前方後円墳とされる形状が明確ではないため、同年7月に試掘調査を行い、また県文化財審議会委員山高正晴氏にも現地調査を依頼した。戦前に勾玉が出土したとされ、現地が古墳である可能性は高いものの、試掘調査の結果も明確に同地を前方後円墳と認定するには至らなかった。推定の範囲では、工事予定地は前方部を通過するものとみられ、文化課ではなお慎重を期し、道路線形の変更を協議したが、地域における道路建設の必要性を鑑み、また古墳の形状が明確でないこと、「後円部」とみなされる部分については、現状保存が図られることなどから、一部現状変更もやむなしとの判断から、工事により影響を受ける「前方部」とみなされる部分についての発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、北郷泰道の担当で、昭和62年5月22日から7月1日の間実施した。

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 発掘調査の経過

小半田古墳は、丘陵端部に派生し、西に突出した自然地形を利用して、築造されたとみられ、

西に「後円部」とみなされる不整形のタマゴ状の高まりがあり、西前面にはお堂が建てられている。「後円部」後方にくびれがみられ、東に「前方部」とみなされる地形が丘陵に連なっている(第2図)。「前方部」は、江戸時代から現代までの約120基の墓地となり、事前に改葬が行われており、ほとんど攢乱を受けている状態であった。

発掘調査は、「墳丘部」を基本的には四分割のトレンチを設定し、縦横のトレンチを確認の状態に応じて増設していくことで進めた。

また、自然地形か人工造成かの判断のため、財団法人山梨文化財研究所外山秀一研究員に地質学の立場から現地調査を依頼した。

第2節 調査の結果

結論的には、古墳時代を指示する遺物は一切出土しなかった。しかし、南北に裁断する形で設定したA～Bトレンチ、C～Dトレンチ、1-a～1-bトレンチ、C'～3'トレンチの断面観察の結果、人工の客土とみられるレキが混入する暗褐色土層(Ⅲ-1～3層)が認められ、また最終的に表土層及び近時の客土と判断される土を除去した結果、円丘状をなす土層の状態を検出している(図版2)。

近世期の墓坑で各所が裁断され連続的に土層を観察することが困難であったが、土層の基本は、I層表土層から、II層黄褐色ロームがありIII層のレキ混入土層を覆っている。

III層が、周辺土層の観察の結果からも自然堆積の土層とは考えられず、人工の盛り土と判断した。しかし、この土層は調査地の北半分においてのみ認められ、南半分には認められていない。

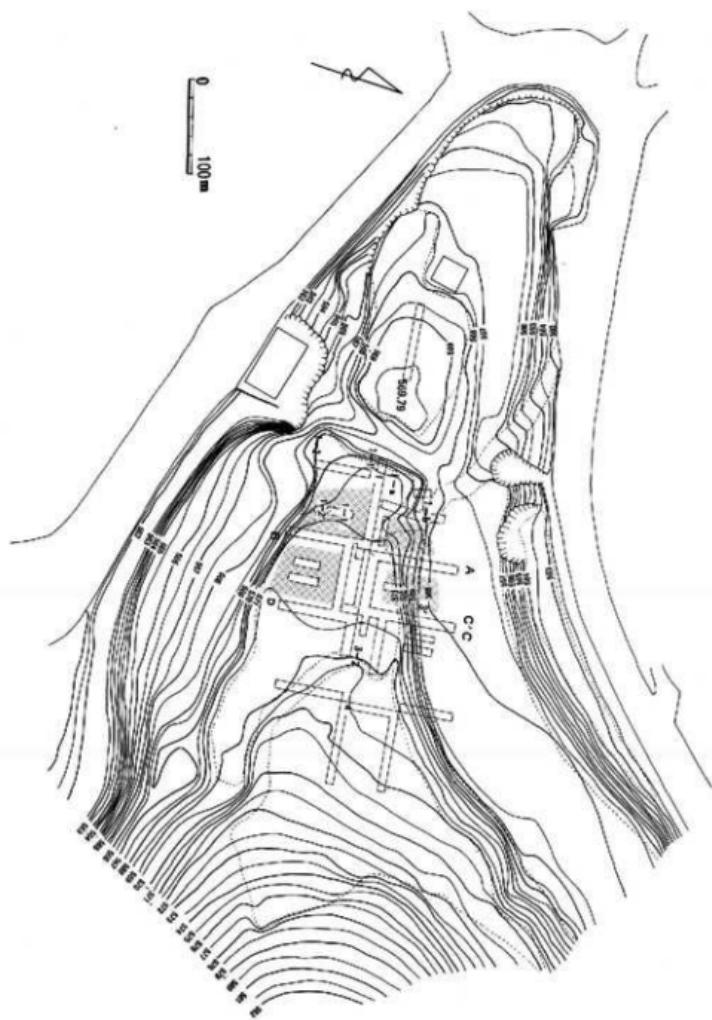
IV層からが地山の土層とみられ、VI層は明瞭ではないがアカホヤ層とみられる。

また、当初から指定の主要部として「後円部」と想定されているお堂裏にもトレンチを設定したが、埋葬主体等遺構の検出はみられなかった。

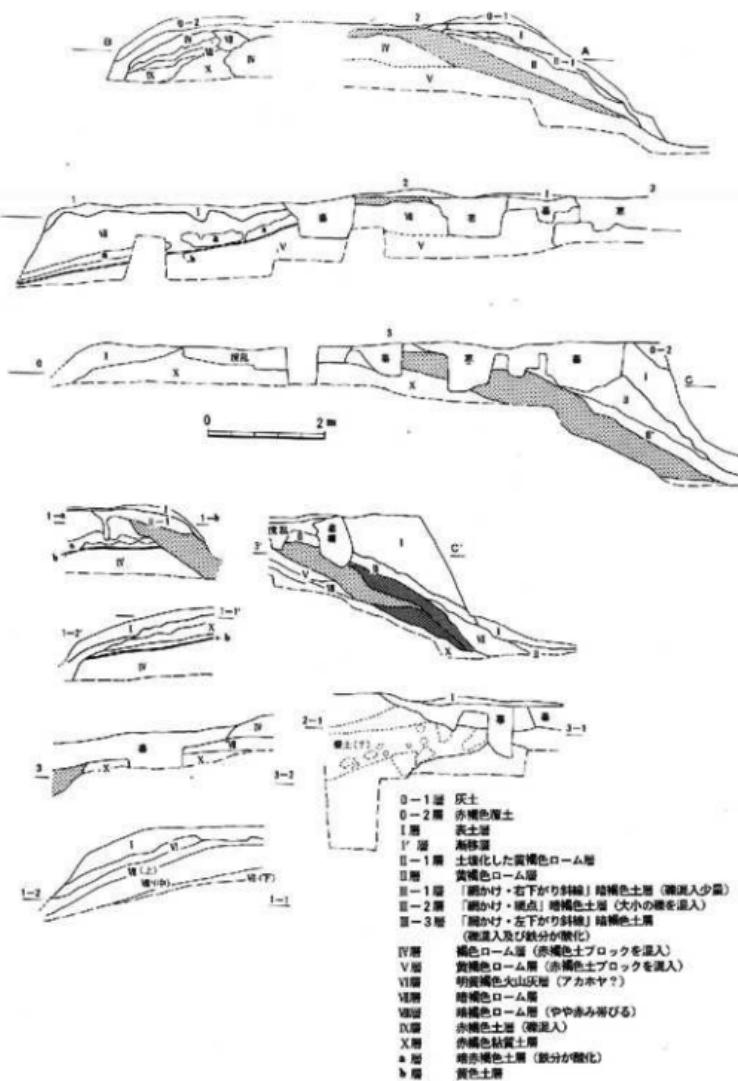
第III章 まとめ

以上の調査結果から、対象地を前方後円墳と積極的に判断することは出来ないが、少なくとも「前方部」とみなされた調査対象地は、「前方部」的形状を示さず、むしろ「円墳」的形状を示すとみなされる。このことから、前方後円墳とすれば東側が「後円部」で西側が「前方部」とみなすべきで、また前方後円墳でないとすれば、丘陵端部に近接して築造された2基の円墳とみなすべきであろう。

この二つの想定から、戰前表採の勾玉の存在を評価した上で、残された形状から判断する限り、積極的に前方後円墳と判断する材料はなく、後者の2基の円墳とする蓋然性の方が高いと思われる。



第2図 小半田古墳地形測量図及びトレンチ設定図



第3図 小半田古墳トレンチ土層図

図版
1



小半田古墳遠景（北方から）



発掘調査風景



2-1~3-1 トレンチ土層の状態



2-A トレンチ土層の状態



A～C間 検出面の状態



A～C間 検出面の状態



2-A トレンチ土層及び検出面の状態



3～3-2 トレンチ土層の状態

平成3年度発掘調査一覧（発掘期日、面積は発掘調査通知による）

番号	遺跡名	所在地	発掘期日	主体	調査員	遺構・遺物	備考
1	千達原跡	高崎市大字 緑瀬4676-11	3. 4. 8 ~ 4.30	町	山岩 薫	30m ²	畠地造成
2	二ツ山第3遺跡	田野町字二 ツ山甲5600 外	3. 4. 8 ~ 5.10	町	森田 浩史	1,500m ²	宅地造成
3	上野遺跡・ 緑ヶ丘遺跡	西都市大字 茶臼原字緑 ヶ丘286-1 外	3. 4.15 ~ 4.26	市	養方 政幾	60m ²	確認工場建設
4	西原第2遺跡	都城市久保 原町8584-1 外	3. 4.18 ~ 5.31	市	桑畠 光博	7,000m ²	小学校建設
5	瀬戸ノ上 達跡	都城市都島 町1272-6 外	3. 4.20 ~ 6.10	市	重永 卓爾 横山 哲英	12,732m ²	宅地造成
6	三納代地区 遺跡	新富町大字 三納代	3. 4.22 ~ 7.23	県	東 恵章	4,000m ² 溝9、弥生後期 ~古墳初頭土器群	河川改修
7	丸山遺跡	西都市大字 三宅字丸山 5288 外	3. 4.26	市	養方 政幾	5m ²	確認苗木植樹
8	田代ヶ八重 遺跡	須木村大字 中原字田代 八重	3. 5. 1 ~ 6. 3	県	吉本 正典	700m ² 繩文（後期） 市来式・西平式土器 石斧、石鎌等	田代八重ダム建設
9	鰐肥城下町 遺跡	日南市大字 楠原字舞鶴 跡4237-1 外	3. 5.17 ~ 11.25	市	岡本 武憲	1,000m ²	小村記念館建設
10	新立遺跡	西都市大字 童子丸字新 立666-4 外	3. 5.20 ~ 10.31	市	養方 政幾	3,970m ²	市営墓地造成
11	後藤野遺跡	串間市大字 余留字後藤 野1464-3 外	3. 5.23 ~ 8.31	市	* 山田洋一 郎	3,000m ² 旧石器～縄文早 期集石遺構10・配石遺構 1、縄文土器	埋蔵整備

番号	遺跡名	所在地	発掘期日	主体	調査員	遺構・遺物	備考
12	三幸ヶ野跡	串間市大字一氏字三幸ヶ野	3. 5.23 ~ 11.8	市	宮田浩二 *山田洋一郎	6,000m ² 繩文後期竪穴式住居跡48・集石遺構・土坑、弥生土器	は場整備
13	妙見跡	えびの市大字東川北字妙見	3. 5.27 ~ 12.25	県	吉本正典 中津川浩	5,700m ²	九州総貿易自動車道
14	祇園原跡	新富町大字新田14948-1 外	3. 5.23 ~ 6.1	県	石川悦雄		確認は場整備
15	東立野地下式横穴墓	西都市大字三宅字東立野4711	3. 5.27 ~ 5.31	市	日高正晴	10m ²	畑地耕作
16	緑ヶ丘跡	西都市大字茶臼原字緑ヶ丘286-1 外	3. 5.29 ~ 6.28	市	日高正晴	1,000m ²	工場建設
17	青島村古墳	宮崎市大字折生追字箸方329	3. 6. 1 ~ 6. 5	市	中山豪	603m ²	確認
18	川原崎跡	国富町大字深年字川原崎3654	3. 6. 3 ~ 6.15	町	新名祐史	1,000m ²	土砂採取
19	日和城跡	高城町大字大井手字桜馬場2643-5	3. 6. 6 ~ 6.19	町	白谷健一	223m ²	資料館建設
20	橋山(B地区)遺跡	高岡町大字花見字橋山2139-八外	3. 6. 7 ~ 9.30	町	*谷口武範	5,000m ²	企業団地
21	黒石遺跡	都農町大字川北11760外	3. 6.10 ~ 8.10	町	吉永真也	5,000m ²	公園造成、道路等
22	久玉遺跡(第4次調査)	都城市郡元町3066-7, 3052, 3054-3 外	3. 6.10 ~ 8.9	市	矢部喜多夫	2,000m ²	土地区画整理

番号	遺跡名	所在地	発掘期日	主体	調査員	遺構・遺物	備考
23	速日峰地区遺跡	北方町已	3. 5.10 ~ 7.31	町	小野信彦	10,000m ²	ほ場整備
24	天ヶ城跡	高岡町大字内山3003-38外	3. 6.19 ~ 11.30	町	島田正浩	3,000m ²	資料館等建設
25	田向遺跡	日之影町大字岩井川字田向2535-1	3. 6.25 ~ 10.5	県	飯田博之	1,799m ² 繩文後期堅穴住居跡1、繩文早期集石遺構2、早~後期土器群	日之影バイパス
26	学頭遺跡	高岡町大字下倉永687-1,686-1	3. 7. 2 ~ 12. 6	県	菅付和樹 北郷泰道	910m ² 弥生堅穴住居跡1 ・溝1、近世上坑 弥生中~後期土器	県道改良
27	上山ノ丸遺跡	清武町大字加納字小丸丙1171-1外	3. 7. 1 ~ 7.15	県	長友郁子	150m ² 繩文土器、陶磁器	県道改良
28	佐土原城跡	佐土原町大字上田島字谷	3. 7. 8 ~ 8.10	町	木村明史	600m ²	公園整備
29	上南方地区遺跡	延岡市細見町3725外	3. 6. 1 ~ 4. 1.31	市	山田聰 *長友郁子 *谷口武範	12,000m ²	ほ場整備
30	都之城跡	都城市都島町719-1外 南鷹尾町675-1外	3. 6.17 ~ 7. 6	市	業烟光博	292m ²	確認
31	荒木野遺跡	延岡市差木野町6105-2外	3. 6.24 ~ 6.29	市	山田聰	120m ²	工場用地造成
32	下村窯跡群	佐土原町大字東上那珂字山田	3. 7. 1 ~ 8. 3.31	町	木村明史 *長津宗重	10,000m ²	ゴルフ場建設
33	田口野第3遺跡	高千穂町大字三田井字田口野881-1	3. 7. 3 ~ 7. 5	町	*北郷泰道	(14,237m ²)	確認 公共駐車場

番号	遺跡名	所在地	発掘期日	主体	調査員	遺構・遺物	備考
34	下川原遺跡 (丸谷川地区)	都城市丸谷町	3. 7. 8 ~ 10.11	県	石川悦雄	7,500m ² (2,100m ²) 近世後期水田跡 (14枚) 染付、陶磁器	丸谷川 河川改修
35	城ヶ尾遺跡 ・野中第2 遺跡	高城町大字 石山字城ヶ 尾・宇野中	3. 7.15 ~ 12.28	町	白谷健一	2,950m ²	ゴルフ 場建設
36	大塚遺跡	北郷町大字 北村内字大塚	3. 7.22 ~ 8. 2	県	面高哲郎	200m ²	確認 広域農道
37	蚊口浦古墳 隣接地	高鍋町大字 蚊口浦字蚊 口1-27	3. 7.22 ~ 7.26	町	山本格	60m ²	確認 公園整備
38	戸角地下式横穴墓	国富町大字 八代北保字 戸角3624	3. 7.23 ~ 7.25	町	新名祐史	9m ²	耕作中
39	松原地区第 II-2遺跡	都城市郡元 町3138外	3. 7.29 ~ 9.30	市	矢部喜多夫	2,500m ²	公園造 成
40	金石城跡	都城市庄内 町13245-9	3. 8. 1 ~ 10.31	市	横山哲英	14,067m ²	土砂採 取
41	吉村遺跡	高崎町大字 繩瀬字池田 1178-1	3. 8. 5 ~ 9.30	町	山崎薫	280m ²	町道改 良工事
42	雀ヶ野遺跡	高城町大字 四家字雀ヶ 野304-23	3. ~ ~	町	白谷健一	20m ²	農道建 設
43	櫛間城跡	串間市大字 西方字上ノ 城2918-2 外	3. 8. 8 ~ 6. 3.31	市	*東 篠草 宮田浩二	22,100m ²	工場用 地造成
44	三納代地区 遺跡	新富町大字 三納代字志 戸平101-1 外	3. 8.12 ~ 4. 3.12	町	有田辰美	30,000m ²	ほ場整 備

番号	遺跡名	所在地	発掘期日	主体	調査員	遺構・遺物	備考
45	溜水地区遺跡	新富町大字 新田字溜水 3984 外	3. ~ ~	町	有田辰美	10,000m ²	は場整備
46	原田・上江遺跡群	えびの市大字原田南原田	3. 8.22 ~ 8.27	県	面高哲郎	100m ²	確認 都市計画街路
47	牧ノ原古墳群	高城町大字 大井手3570	3. 8.26 ~ 8.29	町	白谷健一	40m ²	プロンズ像建設
48	熊野第1遺跡	宮崎市大字 熊野6958外	3. 8.26 ~ 9.30	市	中山豪	1,920m ²	市道改良
49	倉内遺跡	都城市下水流町3355外	3. 8.30 ~ 10.22	県	長友郁子	1,200m ² 古墳時代堅穴住 居跡4、須恵器、手づくね土器、炭化材	県道改良
50	加治尾遺跡	都城市南横 市町2069-2 外	3. 9. 2 ~ 9. 7	市	柴畠光博	m ²	確認 宅地造成
51	陣内遺跡	高千穂町大字三田井字 車迫292-2	3. 9.17 ~ 4. 3.31	町	*北郷泰道	55m ²	保存整備
52	大神原遺跡	日向市美々津町4239-1 ~4238-1	3. 9.17 ~ 10. 1	市	緒方博文	m ²	確認 市道改良
53	横尾原遺跡	都城市大岩 田町5998-2	3. 9.24 ~ 10.12	市	柴畠光博	800m ²	埋立地造成
54	園田城跡	えびの市大字 櫻田字園田361-4外	3. 10.7 ~ 4. 2.29	市	中野和浩	5,101m ²	学園都市建設
55	穗北城跡	西都市大字 穗北字谷ノ前4819-3 外	3. 10.14 ~ 10.22	県	菅付和樹	1,688m ² (93m ²) 腰曲輪、ピット群、土坑 梁付、陶器器、土練	県道改良

番号	遺跡名	所在地	発掘期日	主体	調査員	遺構・遺物	備考
56	川南古墳群 45号墳接地	川南町大字 川南字西別 府	3. 10.15 ～	町	島岡 武	126m ²	確認 水路改 修
57	高三納遺跡	西都市大字 平郡字高三 納5807-1 外	3. 10.11 ～ 11.30	市	蓑方政幾	1,800m ²	集落内 道路
58	宝財原遺跡	西都市大字 南方字宝財 原	3. 10.11 ～ 11.30	市	*石川悦雄	1,170m ²	水兼農 道
59	吉野遺跡	延岡市吉野 町1584	3. 10.14 ～ 11.30	市	山田 聰	1,400m ²	市道改 良
60	水流遺跡	えびの市大 字西長江浦 324 外	3. 10.14 ～ 4. 2.29	市	*飯田博之	4,000m ²	は場整 備
61	丸谷地区 遺跡	都城市丸谷 町3228 外	3. 10.22 ～ 4. 1.31	市	*長友郁子 *山田洋一 郎	9,000m ²	は場整 備
62	並木派遺跡	都城市高木 町6238-2 外	3. 10.28 ～ 10.31	市	矢部喜多夫 栗 烟光 博	m ²	確認 農村地 域工業
63	浄土江遺跡	宮崎市浄土 江町108-2	3. 10.28 ～ 12.26	市	中山 豪	5,600m ²	区画整 理
64	椎屋形第1 遺跡	宮崎市大字 細江字椎屋 形4938 外	3. 10.28 ～ 4. 1.31	市	*菅付和樹	4,500m ²	は場整 備
65	機尾原遺跡	都城市大岩 田町5597-5	3. 11. 2 ～ 11.29	市	栗 烟光 博	20m ²	確認 宅地造 成
66		日南市大字 平野字影平 木山1-3 丁目	3. 11. 5 ～ 11.13	市	*面高哲郎	m ²	確認 県立病 院移転

番号	遺跡名	所在地	発掘期日	主体	調査員	遺構・遺物	備考
67	鬼塚地区遺跡	小林市大字 南西方5625 外	3. 11. 6 ～ 12.26	市	中村真由美	2,000m ²	は場整備
68	松尾城跡	山之口町大 字花木	3. 11.18 ～ 11.21	町	*面高哲郎	100m ²	確認公園整備
69	大塚遺跡	北郷町大字 北河内字大 塚4608-7 外	3. 11.25 ～ 12.13	県	面高哲郎	500m ²	広域農道
70	童子丸遺跡 上妻遺跡	西都市大字 童子丸、大 字妻	3. 11.25 ～ 4. 3.31	県	長津宗重	350m ²	国衙郡衙確認 調査
71	高平城跡	日向市大字 塙見字久保	3. 11.28 ～ 4. 6.30	県	吉本正典 飯田博之	5,200m ²	広域農道
72	久玉遺跡 (第4次D 区)	都城市郡元 町3067-1、 3068-1	3. 12. 4 ～ 12.26	市	矢部喜多夫	400m ²	区画整理
73	祝吉第2 (天神原)遺 跡	都城市早水 町3509-1 外	3. 12. 9 ～ 12.20	市	桑畠光博	32m ²	確認工場用 地造成
74	上ノ園第2 遺跡	都城市早崎 町1841-3、 3007.3010 外	3. 12. 9 ～ 12.21	市	横山哲英	m ²	確認土地区 画整理
75	笹ノ窪遺跡 大原遺跡	北郷町大字 郷之原字筆 ノ窪字大原	3. 12. 9 ～ 4. 7.17	町	時元省二	8,300m ²	ゴルフ 場、ホ テル
76	原口第2 遺跡	西都市大字 三宅字原口 二ノ西3728 外	3. 12.10 ～ 4. 2.20	市	糸方政機	1,200m ²	道路改 良
77	三俣城 (松尾城)跡	山之口町大 字花木字山 田	3. 12.13 ～ 12.27	町	*桑畠光博	200m ²	公園造 成

番号	遺跡名	所在地	発掘期日	主体	調査員	遺構・遺物	備考
78	今井野遺跡	延岡市大字天下字今井野1231	3. 12.20 ~ 4. 2.15	市	山田 悠	1,000m ²	市道改良
79	中池遺跡	高城町大字大井手字小杉	3. 12.24 ~ 12.26	県	面高哲郎	20m ²	確認公園整備
80	宗栄司遺跡	高岡町大字小山田字宗栄2048-18	4. 1.16 ~ 1.31	町	島田 正浩	1,000m ²	農地掘削・整地
81	南町遺跡	門川町大字門川尾末1100~5外	4. 1.20 ~ 2.29	町	窪田麗子	380m ²	土地区画整理
82	矢野原遺跡	北方町辰字矢野原・境谷	4. 2. 1 ~ 6.30	県	谷口武範 山田洋一郎	4,800m ²	北方バイパス
83	役所田遺跡	えびの市大字長江浦字役所田外	4. 2. 3 ~ 2.21	県	面高哲郎	150m ²	確認は場整備
84	牧口遺跡	都城市大岩田町5594-2外	4. 2.10 ~ 3.31	市	桑畠光博	1,618m ²	宅地造成
85	木場城跡	高崎町大字繩瀬字中尾	4. 2.17 ~ 3.31	町	山崎 薫	2,200m ²	公園整備
86	笠下下原遺跡	北方町寅(笠下)	3. 10. 1 ~ 4. 1.31	町	小野信彦	6,000m ²	ほ場整備
87	日和城跡	高城町大字大井手字桜馬場2643-5	3. 10. 5 ~ 4. 1.31	町	白谷健一	1,780m ²	公園整備
88	南久保山下水流遺跡	北方町子(南久保山)	3. 11. 1 ~ 4. 1.31	町	小野信彦	8,000m ²	ほ場整備

番号	遺跡名	所在地	発掘期日	主体	調査員	遺構・遺物	備考
89	南今泉地区遺跡	清武町大字今泉丙字上ノ原外	4. 2.10 ～ 6.30	町	伊東但	20,000m ²	ほ場整備
90	三納代地区遺跡	新富町大字三納代字志戸平	4. 2.14 ～ 3.27	県	菅付和樹	6,100m ²	河川改修
91	穆佐城跡	高岡町大字小山田925-2外	4. 2.24 ～ 2.29	町	島田正浩	300m ²	確認
92	車板第2遺跡	宮崎市大字加江田477-3	4. 2.24 ～ 3.31	市	中山豪	1,400m ²	区画整理
93	延岡城跡	延岡市東本小路177-2外	4. 2.28 ～ 3.14	市	山田聰	120m ²	確認公園整備
94	延岡城跡	延岡市東本小路190-1外	4. 2.28 ～ 3.4	市	山田聰	50m ²	確認公園整備
95	高城城下町遺跡	高鍋町大字上江1339-2外	4. 3. 4 ～ 3.19	県	長友郁子	1,000m ²	河川改修
96	深溝遺跡	日向市大字日知屋字深溝599-3外	4. 3. 9 ～ 3.16	市	緒方博文	1,000m ²	公園整備
97	南方遺跡	門川町大字門川尾末937-2	4. 3.16 ～ 3.31	町	窪田麗子	630m ²	土地区画整理
98	塚原古墳群内	高鍋町大字鍋瀬字前原1242-25	4. 3.16 ～ 3.21	町	山崎薫	50m ²	確認住宅建築
99	鈴肥城下町遺跡	日南市大字板敷8170-4~12	4. 3.17 ～ 3.24	市	岡本武憲	1,773m ²	確認宅地造成

番号	遺跡名	所在地	発掘期日	主体	調査員	遺構・遺物	備考
100	下北方古墳 1号墳周辺 遺跡	宮崎市下北方町塚原 5860-口外	4. 3.18 ～ 3.25	市	野間重孝	956ml	確認
101	狐塚古墳	日南市大字 黒田字元弓 塚3649-2	4. 3.25 ～ 3.31	市	岡本武宣	225ml	

平成3年度発行宮崎県・市町村発行埋蔵文化財関係調査報告書一覧

	報告書名	遺跡の所在地	時代	発行年月	発行機関
1	宮崎県文化財調査報告書第35集 (園田遺跡IIほか)	園田遺跡II(児湯郡新富町)	弥生中～後期	平4.3	宮崎県教委
2	内野々遺跡－林業試験場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	東臼杵郡西郷村	縄文早期、弥生後期～古墳初頭	平4.3	宮崎県教委
3	田代ヶ八重遺跡－続北川総合開発建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	西諸県郡須木村	縄文後期、古代～近世	平4.3	宮崎県教委
4	柳山・郡元地区遺跡－年見川小規模河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	北諸県郡三股町	中世集落	平4.3	宮崎県教委
5	海蔵寺遺跡・様屋敷遺跡－国道221号線バイパス建設関係発掘調査報告書－	北諸県郡高崎町	縄文後期、弥生後期	平4.3	宮崎県教委
6	總北城跡－県道杉安高鍋線道路改良工事関係発掘調査報告書－	西都市	中近世	平4.3	宮崎県教委
7	東九州自動車道関連遺跡詳細分布調査報告書(西部～清武間)			平4.3	宮崎県教委
8	国衙・郡衙・古寺跡等範囲確認調査概要報告書I	西都市	奈良～平安古墳	平4.3	宮崎県教委
9	西ノ原第2遺跡	宮崎市	縄文早期、弥生後期、古代	平4.3	宮崎市教委
10	蓮ヶ池横穴群 (蓮ヶ池横穴保存工事及び修景工事)	宮崎市	古墳	平4.3	宮崎市教委
11	二ツ山第1遺跡 田野町文化財調査報告書第13集	宮崎郡田野町	縄文早期	平4.3	田野町教委
12	井手ノ尾遺跡 田野町文化財調査報告書第14集	宮崎郡田野町	縄文早期	平4.3	田野町教委

	報告書名	遺跡の所在地	時代	発行年月	発行機関
13	二ツ山第3遺跡 田野町文化財調査報告書第15集	宮崎郡田野町	縄文早期、中期	平4. 3	田野町教委
14	下村窯跡概要報告書Ⅰ 佐土原町文化財調査報告書第7集	宮崎郡佐土原町	奈良～平安	平4. 3	佐土原町教委
15	高岡町遺跡群細分布調査報告書			平4. 3	高岡町教委
16	奈留地区遺跡（後藤野遺跡）－ 県営農地開発事業奈留地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－ 串間市文化財調査報告書第6集	串間市	縄文早期	平4. 3	串間市教委
17	三幸ヶ野遺跡－県営農地保全整備事業三幸ヶ野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－ 串間市文化財調査報告書第7集	串間市	縄文後期	平4. 3	串間市教委
18	西原第2遺跡、築池地下式横穴墓191-1号、久玉遺跡（第4次調査）、松原地区第II-2遺跡、横尾原遺跡、黒土遺跡 都城市文化財調査報告書第16集	都城市	縄文後～晚期 弥生前～中期 古墳、奈良～平安、中近世	平4. 3	都城市教委
19	屏風谷第1遺跡 都城市文化財調査報告書第17集	都城市	縄文早期・晚期 弥生	平4. 3	都城市教委
20	潮戸ノ上遺跡 都城市文化財調査報告書第18集	都城市	中近世	平4. 3	都城市教委
21	金石城跡－民間の土砂採取工事に伴う発掘調査概要報告書－ 都城市文化財調査報告書第19集	都城市	中近世	平4. 3	都城市教委
22	中大五郎第1・第2遺跡－丸谷地区県営は塙整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告－ 都城市文化財調査報告書第20集	都城市	弥生後期、中世	平4. 3	都城市教委

	報 告 書 名	遺跡の所在地	時 代	発行年月	発行機関
23	遺跡詳細分布調査報告書 高崎町文化財調査報告書第3集			平4. 3	高崎町教委
24	高崎町の文化財 劍削号			平3. 6	高崎町教委
25	鬼塚ヒレ原遺跡－鬼塚地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	小林市	縄文後期、弥生	平4. 3	小林市教委
26	長江浦地区遺跡群（水流・馬場田遺跡）－長江浦地区県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－	えびの市	縄文後～晚期 古墳後期	平4. 3	えびの市教委
27	天ヶ谷遺跡 野尻町文化財調査報告書第5集	西諸県郡野尻町	縄文早期	平4. 3	野尻町教委
28	大年谷遺跡 須木村文化財調査報告書第1集	西諸県郡須木村	縄文早期、古墳	平4. 3	須木村教委
29	寺山遺跡－県営農村総合整備パワロット事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	西都市	縄文早期、弥生 後期、古墳	平4. 2	西都市教委
30	高三納遺跡－農村総合整備モデル事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	西都市	縄文早期、中世 ～近代	平4. 3	西都市教委
31	新立遺跡－公営墓地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	西都市	縄文早期、弥生 終末～古墳初頭	平4. 3	西都市教委
32	西都原古墳研究所年報第8号	西都市	児屋根塚古墳 (茶臼原古墳第1 号墳)について	平4. 3	西都原古墳 研究 所
33	七又木地区遺跡（八幡上、七又木、銀代ヶ迫遺跡） 新富町文化財調査報告書第13集 (2分冊の1)	児湯郡新富町	弥生後期、古墳 前期	平4. 3	新富町教委

	報告書名	遺跡の所在地	時代	発行年月	発行機関
34	北原牧地区遺跡（北原牧古墳、藏園古墳） 新富町文化財調査報告書第13集 (2分冊の2)	児湯郡新富町	古墳	平4. 3	新富町教委
35	町内遺跡（志戸平、風早A・B、 奥牟田、涌水第II遺跡） 新富町文化財調査報告書第14集	児湯郡新富町	弥生終末～古墳 前期	平4. 3	新富町教委
36	黒石遺跡 都農町文化財調査報告書第4集	児湯郡都農町	縄文早期	平4. 3	都農町教委
37	上南方地区遺跡（中尾原遺跡、 畠山遺跡）－県営圃場整備事業 上南方地区に伴う埋蔵文化財調 査概要報告書－	延岡市	縄文後～晩期、 弥生後期～古墳 後期、中世	平4. 3	延岡市教委
38	差木野遺跡－企業誘致用地造成 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 書－	延岡市	弥生後期～終末、 室町、江戸	平4. 3	延岡市教委
39	速日峰地区遺跡II－平成3年度 県営は場整備事業に伴う発掘調 査概要報告書－	東臼杵郡北方町	縄文早期、弥生 後期～古墳前期	平4. 3	北方町教委
40	笠下下原遺跡－平成3年度農村 基盤総合整備事業に伴う発掘調 査報告書－	東臼杵郡北方町	縄文中期、弥生 後期～古墳前期	平4. 3	北方町教委
41	南久保山小掘町遺跡－平成3年 度農村基盤総合整備事業に伴う 発掘調査報告書－	東臼杵郡北方町	弥生後期～古墳 前期、中世	平4. 3	北方町教委
42	陣内遺跡保存整備報告書 高千穂町文化財調査報告書第9 集	西臼杵郡高千穂町	縄文後～晩期	平4. 3	高千穂町教委

宮崎県文化財調査報告書
第36集

平成5年3月

発行 宮崎県教育委員会
編集 宮崎県教育庁文化課

